

「新興国・老犬党」の蹉^さ跌^{てつ}と試練
—— 2011.7.23（中共「90歳誕生日」）高速鉄道
追突・転落事故の衝撃と啓示

夏 剛

世界2位の経済大国達成直後の急進発展の蹉^わ跌^{かい}：「和諧号」壊滅の惨劇・処理の特異性

辛亥革命^{しんがい}100周年に当る2011年は新世紀乃至新千年紀の中国史上、目立たないながら重要な転換点^{みな}と見做すことが出来る。前年、北京五輪^{オリンピック}（08年8月8～24日）に次いで上海万国博覧会（5月1日～10月31日）開催の快挙を遂げた中国は、リーマン衝撃^{ショック}（08年9月15日）後の世界的な金融危機で沈んだ米国・欧州・日本を横目に、この年から初めて世界第2の経済大国として好調の高成長を続けた。ところが会心の驀^{ぼくしん}進中の思わぬ蹉^さ跌^{てつ}に由って、表面的な繁栄の裏の諸々の社会的な矛盾や構造的な歪^{ゆが}みが次々と表面化し、胡锦涛政権が04年から唱えて来た「社会主義和諧（調和）社会」構築の夢は脆くも崩れた。

7月23日（土曜）20時30分05秒、甬温線^{ようおん}（[浙江省]寧波—温州高速鉄道 [在来線型]）の温州市域内で、北京発福州（福建省省都）行きの列車D301号（16輛編成、事故発生時搭載乗客1072人）が時速99^キの急行を以て、附近の落雷の影響で高架橋を時速16^キで緩行していた杭州（浙江省省都）発福州行きのD3115号（同16輛、558人）に追突した。前者の後尾2車輛と後者の5車輛が脱線し、「D301」の2、3号車が空中に抛^{ほう}り出されて約17^{メートル}下の野菜畑に落下し、40人死亡・172人負傷の大惨事と成った。¹⁾32時間と35分に及ぶ運行中断と193716500人民元（当時の為替割合では1元＝約12.2円）の直接的な経済損失を招いたが、地に墜ちた「和諧号」の惨状が象徴する物心両面の安全上の信用失墜の損失は測り知れない。

追突車と被追突車の1流の「硬^{ハード・ウェア}件」（[日本]川崎重工業の技術供与で製造された「CRH2」型と加^{カナダ}奈^ダ陀^ダ製の「CRH1」型）と、列車制御中心^{センター}機関の設備の設計上の欠陥及び使用許可の審査の不備、落雷に由る設備故障への対応が不適切な3流の「軟^{ソフト・ウェア}件」との乖離は、同年2月25日の罷免^{ひめん}まで8年も鉄道部部长（鉄道省大臣）を務めた劉志軍の汚職等の腐敗が根底に有るが、

特別重大事故の直後に国内外の大衆・世論の公憤は当局の人命軽視と真相隠蔽に集中した。地面に横転している車輛の上に突き刺す様に摺り落ちた4号車を下に突き落す形で片付け、毀損車輛の残骸を地中に埋めて置き又掘り起した等の衝撃的な光景が世界中に流れたが、22年前の「6.4」武力弾圧の際と違って衆人の環視を顧みず堂々と遣り除けた無神経さは、彼の悪名高い確信犯的な蛮行と勝るに劣らぬ鈍感であるが故の愚行としか言い様が無い。

國務院「7.23」甬温線特別重大鐵路（鉄道）交通事故調査組は調査報告書（12月25日）で、事故の応急処置の全過程で露呈し社会の疑念と負の影響を招来した鉄道部の過誤として、「動車」（時速250^キ以上の高速鉄道列車）運行中の特大事故への想定と応急機制の不備、情報開示の遅れと社会的な関心に応える回答の不正確さ等を指摘した上で、取り分け事故現場の処置の従来方式を単純に踏襲し、その場で穴を掘って毀損した先頭車輛と散乱した部品を中に入れて埋めようとした事は、制止されたものの社会で良くない影響を及ぼした、と特筆している。翌朝5時30分に上海鉄道局の「有関負責人」（関係の責任者）が件の措置を仕切り、愈々埋めようとした段階で「有関領導同志」（関係の指導者）に制止され未遂に終った、という経緯の説明に続いて、穴を掘る時点では橋の下の車輛・人員に対する捜査・救援は已に完成し、現場検証も終了し物証は確保済みであった、と代弁調で付け加えている。

橋の下の事故処理指揮者は鉄道部副部長（次官）・温州市副市長・上海鉄道局副局長であるが、54人の関係者に対する党紀・「（行）政紀（律）」処分に就いての報告書の建議では、上海鉄道局常務副局長・党委員会常務委員王峰がこの件の全責任を負うことに成っており、「記過」（過失を記録に残す）処分（党内処分無し）の提案は直ちに國務院に了承された。責任の所在を他の記述で職務・氏名を特定しているのに此処で「有関負責人」としたのは、時刻不詳の「制止」の曖昧な主語の「有関領導同志」との整合性を図る為かと推測される。次の段落は胡錦濤総書記・温家宝総理の委託由る張徳江副総理一行の現地入りで始まるが、張は温州到着（11時10分）後に負傷者への見舞い・慰問と事故現場への視察を行い、胡・温の意思に由って人員救助第一で死角や漏れが無い全力捜査を要求し、掘った穴に放置された列車の残骸を見ると埋めては成らないと指示し、調査・分析の為に現場を保護し車輛を適切に保管する必要があると強調した、と言う。上記の「有関領導同志」が張であるか否かによって制止命令の時間は大きく違って来るが、正午頃にも禁止の指示が要る程地中に葬られそうに成っていた状態が裏付けられている。

「有関領導同志」の制止云々の記述に次いで最終的には埋められなかったと書いてあるが、1度も土中に埋めなかったかの様な印象は内外の報道や大衆発信の情報とは異なっている。巨大な重機で車輛を粉々に砕いて埋めた光景はインターネット上の動画投稿情報検索体系に掲載され、鉄道部發言人（報道官）王勇平も24日深夜の会見で先頭車輛を土で覆った事を認めている。地面が泥濘るんでいる中で機械を現場に入れる為の危険回避の措置と言った当局の弁解は、計器類が有る運転室も埋められた事に対する「証拠隠滅」等の批判には無力であった。高架橋から

「死に体」の車輛を轟然と地面に落す場面がテレビで流れた時の反応と同じ様に、遺体乃至生存者が中に居る可能性から無謀や「不敬」を感じる国民は少なくなかった。²⁾ 2008年「5.12」四川大地震の4日後に日本の国際緊急救助隊は広元市青川県の病院宿舎の倒壊現場で、瓦礫の下から産後休暇中だった宋雪梅（28）と生後75日の娘黄薇氷の遺体を発見し、15時間も掛けて掘り出した後に丁寧に収容した上で両側に列を成して黙禱を捧げたが、民衆に多大な感動を与え日本人観を改善させたその礼儀正しい振舞いと比べるまでもなく、同胞の生命や尊厳を軽んじる様な印象が付き纏う今回の挙措は反発と不信を惹起し易い。

埋設に関する歯切れの悪い弁は「不在現場証明」に因んで「不損現場証明」と言えるが、報告書のもう1つの釈明は24日4時頃に生存者捜査打ち切りの報道があった事に就いて、橋の上では依然と捜査を進めており誰も終了の指令を出していないと主張する点である。人員捜査・救助は一応完成したとする橋の下の現場の責任者の談話が誤解の元とされるが、捜査を5、6回繰り返した末に生命探査装置を使っても生存の気配が無いと言うその根拠は、事故発生8時間後のこの動きに限らず橋の上の救助活動にも方々からの疑念を及ぼした。良識有る温州市特種警察支隊長邵 曳戎が抗命し車体を移動しない儘捜査を継続させた結果、17時頃に遂に「D3115」の最後尾車輛から2歳の女兒項焯伊を発見し間もなく救出した。³⁾ 雷雨の夜に同乗の父項余岸・母施李虹（共に地元温州の教師、歿年30、29）を失った後、炎天下の密封状態で50℃台に達した高温の車内で遺体や重い物体の下敷と成っていながら、もう1人の男児（長時間の圧迫に因り救出後に窒息死）と共に20時間強も生き延びた事は、宿命的に多難な環境・歴史の中で天災・人災を凌ぐ生命力の強靱さを鮮烈に体现している。毛沢東時代の庶民の強かな生き様を描いた映画『芙蓉鎮』（上海映画製作所、1987）には、「活下去！像牲口一樣地活下去！」（生き抜け！家畜の様に生き抜け！）という名台詞が有る。「文化大革命」の政治的な迫害に由る無実の罪で懲役10年の刑を言い渡された主人公は、大雨に注がれる人民裁判の露天会場でこの心底の雄叫びで身籠った妻に勇気を与えている。暗黒の乱世の嵐に耐えて生き残った人々の精神の拠り所を表したこの言葉を振って言えば、人間を家畜並みに粗末に扱う旧い感覚は「文革」終了35年後のこの際にも見受けられた。西暦年の下2桁の11と同音・同声調(yīyī)の愛称「伊伊」を持つ子の救出は否応無しに、運行再開を優先し調査の為の現場保全乃至遭難者の安否を無視する乱暴さを際立たせた。

28日に鉄道部は所属関係者に由る件の「車内に存命の徴候無し」宣言は無かったと声明したが、中央電視台（テレビ局）の報道番組では24日の4時頃、5時頃、6時47分、7時半頃に、4時には全ての人員捜査・救援は終了しもう生命反応は無いと現場取材の結果を基に伝えた。29日の広州『南方都市报』の特集『7.23温州動車追尾七日祭』の記事は鉄道部の強弁に反論し、CCTVの上記連続報道の他にメディアやネットから確実な証言・動かぬ証拠を多く援引している。例えば、電腦通信用仮名「孤峰駱駝」（孤嶺駱駝）の「網友」（電腦網利用者）が撮った大量の写

真は、5時41分～11時5分の現場の様子を時刻付きで逐一克明に留めており、7時45分に穴を掘る作業が始まり、9時54分に「D301」の4号車が高架から突き落された等の精確な記録と為っている。更に、15時台からの再捜査までの捜査は昼頃のある「高級官員」の到来の前後の1回しか無い、と言う本紙記者趙炎雄の観察も挙げられている。続いて、人員救助から現場整理へと重点が移ったのは鉄道部長の視察との相関を指摘している。3時40分に現場に到着した盛光祖部長は可及的速やかに運行再開を目指すとして檄を飛ばしたが、生命反応は無いと言う報告に基づいたこの指示に沿って目指された18時の再開は結局、被追突車を高架から下ろせという命令を無視した特警・消防隊員の粘り度で救出が成功し、目標より遅い19時から再開可能な状態に修復できた、と言う。4) CCTVで報じられた部長の発言を根拠とする推断は言わば紙上問責や民意裁判の感も有り、地方紙が事故の責任を追究する際に名指しで中央官庁首長に矛先を向けたのは異例である。

28日午前温家宝総理は温州入りし負傷者・一部の遭難者の親族への見舞い・慰問を経て、12時半に事故現場の高架橋下で遭難者に献花した後50分間に亘る異例の記者会見を行い、14回も「安全」という言葉を使って高速道路の信頼の元と為る安全性の大切さを力説した。体調不良で11日間病床に臥して漸く医者^{もと}の許可が出て現地入り出来たと言う説明は、指導者の病を機密として公表せず本人も堅く口を噤む様な国柄では異例中の異例である。実際には17～27日の間に報じられた分だけでも温は会議や外賓との会見に6回出ており、動静報道の無い17～18、23日と25～26日の間の24日には日本国際貿易促進協会代表团と会見し、河野洋平会長（前衆議院議長）等に対して昨夜は事故対応で殆ど寝ていないと披露した⁵⁾ので、執務・外出が不可能な状況とは想像し難く病状を持ち出すのは窮余の苦肉の策と思われる。温は仮令重病でも敢えて被災地等に赴くのが長年演じて来た「慈父」的な役割に似合い、大事な場面に出る為に薬物使用も辞さない指導者の例⁶⁾を見ても病気は大した理由ではない。^{そもそも}建国後61年以来陸・海・空を問わず交通事故の現場に総理が足を運んだ前例は無く、同じ胡・温時代の2008年4月28日に山東省淄博市域内で起きた列車特大事故（北京発〔山東省〕青島行きのT195列車が脱線し、同省煙台発〔江蘇省〕徐州行きの5034列車と衝突）では、死・傷者が倍ぐらいの72人・416人なのに中央から張徳江副総理が派遣されただけである。

建国後の鉄道事故（公表分）⁷⁾ではこの1件は死者数が5位、死傷者総数が1位とされており、而も同じ膠濟路線（青島―済南〔同省省都〕）で同年1月23日に国内初の高速鉄道列車重大事故（D59動車組が規則違反の路線内工事中だった農民工18人を圧死）が起きたばかりである。独逸の植民者が1899年に強行に建設し1904年に開通した膠濟鉄道では2007～09年に、重大事故が5件も起きて了い中国鉄道史上稀有の頻度・損害と悪質性・悪影響を記録した。「4.28」の惨烈さと同線路の杜撰管理に対する公衆の激昂は天を衝く様な勢いであった⁸⁾が、北京五輪開催を控えて安全・安定に腐心する総理を現場視察にまでは突き動かせなかった。死者数が歴

代7位の「7.23」の為に温が淄博の2.5倍以上も遠い温州（両地の首都との直線距離は其々400^{キロ}弱と約1400^{キロ}）に出向いた事は、通常なら破格の配慮として称賛されることが有っても遅れに負い目を感じる必要が無い。慣例を破り而も^{しか} ^{じくじ} 忸怩たる思いを表した要因として異常事態の深刻さが先ず挙げられるが、想定外の事情には事故処置の拙速・粗雑とこれに対する内外の世論の批判殺到が有ろう。もう1つ思い当る理由は国家の^{イメージ} 形象・威信に関する高速鉄道の「面子^{プロジェクト} 工程」的な性質に在り、国の「顔」なる首相が乗り出した方が鉄道商戦に絡む国際的な信用回復にも有利であろう。

建国後の犠牲者最多の鉄道事故は1981年7月9日に四川で自然災害がもたらしたもので、成昆線〔四川省〕成都—昆明〔雲南省省都〕路線を走行中の442列車の前半部分が、土石流で崩れた橋から^{だいとが} 大渡河に落ち死者・行方不明者が130人、負傷者が146人に上った。2位は97年4月29日に京広線（北京—広州〔広東省省都〕路線）の湖南榮家湾駅で起き、長沙（湖南省省都）発（湖北省）茶嶺行きの818列車に対する昆明発鄭州（河南省省都）行きの324列車の追突で、死者126人・負傷者230人を出した。同じ3桁の死者を出した3位は78年12月16日に河南蘭考県楊莊駅で起き、南京発西寧（青海省省都）行きの87列車が所定の停車をせず走り続け、西安（^{せんせい} 陝西省省都）発徐州行きの368列車と衝突し106人死亡、219人負傷と成った。1位と為る不可抗力の悲劇では殉職した運転手の緊急停車措置で後半部分が被害を免れたが、2位は4ヵ月後に無期懲役に処された信号担当の駅員の故意の手抜き作業が主因である。3位は87列車の2人の運転士の居眠りという「低級錯誤」（^{ミス} 単純な過失）が惹起した悲劇で、改革・開放路線を採択する第11期党中央第3回全体会議（11期3中総会）の開幕の2日前の事だけに、「文革」以来の秩序の混乱や道徳の低下に由る無軌道・^{ふらち} 不埒の罪深さを象徴的に現している。

4位は1988年1月24日に昆貴線（昆明—貴陽〔貴州省省都〕線路）の雲南域内で起き、昆明発上海行きの80特急列車の転覆で88人が死亡し、202人が負傷した。同月には7日に湖南域内の京広線を走る広州発西安行きの272列車で火災が起き、乗客の携帯品の^{ペンキ} 番瀝青に由って^ひ 惹き起した事故で34人が死亡し、30人が負傷した。更に17日に拉濱線（〔吉林省〕拉法—^{ハルビン} 哈爾濱〔黒龍江省省都〕）の黒龍江域内で、^{さんかじゅう} 三棵樹発吉林（吉林省の市）行きの438列車と1615貨物列車の正面衝突で19人死亡・76人負傷と成った。18日の間に3件連続で141人の死者を出した事故の責任を取って丁関根鉄道部長は辞任したが、全国人民代表大会（国会）常務委員会が辞任を批准した3月12日の僅か12日後、南京（江蘇省省都）発杭州行きの311列車と長沙（湖南省省都）発上海行きの208列車とが、^{ここ} 滬杭外環線（上海—杭州外廓環状線）の上海域内で正面衝突し28人死亡・99人負傷に成り、死・傷者中の^{それぞれ} 其々27人・37人は日本の修学旅行高校生一行なので涉外事件にまで発展した。「3.24」は建国後最多の死者を出した鉄道人災の97年榮家湾駅事故の追突車の番号と同じで、同じ湖南^{ゆかり} 所縁のこの惨劇の両車中の「311」は死者の^{ほとん} 殆どを占めた国の被災史と結び付ければ、「7.23」追突の年の3月11日に起きた東日

本大震災を連想させる不吉さが感じられて来る。

丁関根の後任李森茂（鉄道部の生え抜き、副部長から昇進）の時代も重大事故が頻発したが、健康上の理由で1992年9月に免職と成った彼の死去（歿年67）の96年には、重大事故・大事故は10件まで減少し20世紀中国の鉄道安全運行の最良水準が記録された。同部の生え抜きで政治部主任・紀律検査委員会書記から抜擢された第10代部長韓杼楨^{しよひん}の努力は、97年9月から党中央紀律検査委員会副書記（常務）を兼務し、98年3月から最高人民検察院院長（最高検察庁検事総長）兼中紀委副書記に転任した（～2002.3）事と合せ考えれば、鉄道運行の安全保障と道徳規範・社会秩序の維持との類似性乃至一体性も感じ取れる。ところが、天災と同じく忘れた頃に来る人災は97年の国際労働節の2日前に最大規模で降り掛った。10年後の前日に死傷者総数が最悪の淄博衝突事故で「4.29」→「4.28」の連環が出来たが、日付の隣接が象徴する災難の連鎖は「7.23」の1周（年）忌の前日に別の形で現れて来た。12年7月22日に李森茂と同じ1929年生れの丁関根が満83歳に成る目前に病歿した事は、第13代部長の時代の高速鉄道列車追突と5代目前の特重大事故多発との通底に目を向かせる。

改革・開放期の人命尊重意識の萌芽^{ほうが}：「渤海2号」石油掘削装置沈没事故処分の意義^{リグ}

丁関根は20歳代前半の1950年代前半から鉄道部で技術・行政の仕事を長年担当し、85年に部長・党組（党の指導^{グループ}）書記に任命された。彼はブリッジ（西洋骨牌^{カルタ}の1種。中国語＝「橋牌」）の相棒としても鄧小平の信頼が厚く、85年に全人代常委副秘書長から鉄道部長に栄転した後、87年に党中央政治局委員候補に成り、92年に委員に昇格し同年から2002年まで党中央宣伝部部長を務めた。鉄道部長を退いた後の4年間には、国家計画委員会副主任、國務院台湾事務^{べんこうしつ}辦公室（事務局）主任、党中央書記処書記、党中央統一戦線工作部部長の要職に就いたので、失点に成らない辞任は非難を避ける避難であり8年前の部長引責の第1例に従ったに過ぎない。「改革・開放元年」（79）の11月25日に渤海湾で「渤海2号」海底石油掘削装置沈没事故が起き、石油工業部海洋石油探査局（所在地＝天津市塘沽^{てんしん とうこ}）の72人の作業関係者が荒波に散った。馬驥^{ばきしゅう}祥局長兼党委員会書記は事故の主要責任者として懲役3年（執行猶予3年）に処され、宋振明石油工業部部長（78～）は80年8月26日に華国鋒総理の提案で全人代常委に解任された。前任に当る75～78年の石油化学工業部（旧称）部長康世恩（副総理兼国家経済委員会主任）も、前日の中央書記処・國務院合同会議で石油工業の主管者として直接的な責任が有ると認定され、副総理^{クラス}級の要人として前代未聞の「記大過」（「経歴^{キャリア}に於ける」重過失記録）処分を受けた。

康は石油生産低迷の難局の中で1981年に石油工業部部長の兼務を命じられ1年務めたが、國務院は71～78年と今回の石油工業総帥を労わるべく82年6月15日に処分を撤回した。皮

肉な事に全人代常委が命じた事故原因の検証はこの温情措置の翌月から進展が有り、装置の引き揚げで判明した設計上の欠陥は康の汚名洗滌に科学的な根拠を追って提供した。⁹⁾ 悪天候（10級以上の強風）の中の対応以前の問題として設備に重大な不備があったとは、時限爆弾の様に設計上の落とし穴が落雷で致命的な惨禍を惹起した「7.23」災厄と通じる。55年に成立した石油工業部は67年からの非常時体制（部長不在、軍事管制委員会主任が責任者）、70年の煤炭（石炭）工業部・化学工業部と合併した燃料化学工業部への編入や75年の改称を経て、78年の再設立で軍人出身の歴代部長と違って生産・油田開発経験者が司る様になった。宋振明は中国石油天然気勘探開発公司総経理（中国石油天然瓦斯探査開発公社総裁）に左遷され、憂鬱・心労が重なる結果90年6月13日に古巣の大慶油田（黒龍江）で64歳の生涯を閉じた。天津市中級人民法院（地方裁判所）の80年9月2日の1審判決で懲役4年を言い渡された馬驥祥は、11月21日の2審（最終審）では情状酌量されたものの瀆職罪の判定は覆されなかった。¹⁰⁾ 「渤海2号」事故の処分には華国鋒時代末期の権力闘争が絡んでいると見る向きも有るが、党紀・国法に依る制裁の軽重はともかく人命軽視から人命重視への転換は意義が大きい。

石油工業部は事故を長らく報告せず死者を「烈士」に祭り上げることで凌ごうとしたが、無念の遺族は8ヵ月後に堪忍袋の緒を切って「救世主」の中紀委（1978年末設立）に訴え、黄克誠常務書記は人民の生命・財産・安全に関するこの重大な問題の徹底調査を指示した。薄一波副総理は80年5月に中華全国総工会（労働組合連合）及び機関紙の責任者に対して、『工人日報』には労働者の権利・意見を反映する報道が減多に無いと辛辣な批判を放ち、「渤海2号」沈没で72人が死んだ事は報道すべきで、憲法に従って仕事をすれば可いと言った。万里副総理・中央書記処書記も6月に労働者の思想・安全問題から遊離した同紙を咎め、当時まだ秘密事項とされたこの事故に触れこの類の問題に蓋をする傾向に警告を発した。記者は労働者の代弁者として恐れずに工場・部・國務院の指導者の官僚主義を批判して可い、と言う呼び掛けに応えて『工人日報』と党中央機関紙『人民日報』が特別体制で取り組み、7月22日の両紙に掲載された記事は重大事故を報道しない建国後の禁則を初めて破った。¹¹⁾ 『工人日報』に対する薄・万の不満は国家経委の意向に唯々諾々である点にも在ったが、経委の初代（56～66）主任の薄と現職（78～81）主任の康とが特に不和でなかったなら、薄が唱えた「官官相護」（役人同士が庇い合い肩を持ち合う）の陋習への打破の実践と見做せる。

遺族の中紀委への嘆願と黄克誠の要請に由る政治局の決断で康世恩の処分が決ったが、党紀肅正の司令塔の関与と党指導部の裁定が無ければと彼は無事でいられたのであろう。政治局で表決が行われた¹²⁾ のは反対・棄権の有無に関らず問題の重大さ・厄介さを示す事で、「石油幫（閥）」の結成・肥大への警戒とその派閥の存在があったとしても不思議ではない。「工業学大慶」（工業は大慶を学べ）という毛沢東の旗印を継承した華国鋒時代（76～81）から、石油工業部の2代目（58～67）部長の余秋里は政治局委員・書記処書記（77～87）を務め、副総理（75

～82) 退任時に新設の國務委員(副総理級)に10人中の序列1位で就任した。康世恩(78～82)の同5位は副総理歴通算11年(56～66, 79～80)の薄一波よりも2位上で、その国家經委主任と余の国家計委主任(75～80)の任期からも華時代での権勢が好く分る。64年2月5日に党中央は「大慶石油会戦」に関する石油工業部の報告書を通達で転送し、10日の『人民日報』社説等に由って大慶を全国の工業の模範とする輿論が形成された。大慶油田(59年9月26日発見)を始めとする数個の特大油田は国民經濟の命脈に関り、75年1月17日に第4期全人代第1回会議で承認された余の入閣(12人中の10位)には、20世紀中期の日本の「鉄は国家也」や毛の「以鋼為綱(鋼を以て綱と為す)と違う様な、20世紀の最後の四半世紀からの資源の時代の「石油は国家也」の価値判断も感じられる。余は80年8月26日に計委主任の職を姚依林副総理・党中央辦公庁主任(事務総長)に明け渡し、同日に設立された国家能源委員會の主任に任命されたものの権勢の縮小は明らかである。「石油戦線」から離脱させられた後は82～87年に解放軍総政治部主任の要職に就いたが、これ程の大物が頂点に居る「石油王国」でも多数の死者が出た特重大事故の激震に堪え難い。

8月27日の『人民日報』社説『深刻的教訓』(深刻な教訓)は海洋石油勘探局に就いて、1975年以来1042件の事故が起き33人の職工が死亡した事にも懲りない怠慢を非難した。石油部推進の大慶油田開発の功績が幾ら大きくても傲慢の資本には成るまいと断じる上で、最も重要な教訓として指導者の独り善がりの傲慢は有っては行けないと結論付けている。党中央の「喉と舌」(宣伝機構)が社説で特定の中央官庁を批判するのは異例の事であり、重大な事故・失策に就いて報道・論評しないという30年余り続いた掟は遂に破られた。如何なる重大事故も迅速で且つ如実に報道しなければ成らず隠蔽・歪曲しては行けない、という当該事故処理に関する國務院「8.25」決定の文言は報道媒体の新しい指針に成った。人命を尊び報道を許す理念が定着した結果88年に重大事故統発で鉄道部長は免職されたが、15年後の中国発の重症急性呼吸器症候群(中国では「非典[型性肺炎]」)騒動の最中でも、衛生部の対応の生温さと首都での実情隠蔽に由って世論の圧力で2人の高官が更迭された。2月12日に国营新華通信社の報道で初めて広東での感染(305例、死亡5人)が伝えられ、国内外に拡散した中で4月2日の國務院常務會議で「非典」退治は最重要事項とされたが、「防治小組」(予防・治療指導本部)責任者張文康と衛生部(張が部長)は後に公式の場で、当局の抑制に鎮静化を印象付ける意図も有ってか感染・死亡数の過少発表を繰り返した為、党中央は事態の深刻さに鑑みて張の衛生部黨組書記と孟学農の北京市委副書記を解任した。¹³⁾

新華社に由る決定公表の20日に開かれた衛生部第3回「新聞發布会」(報道機関向けのフリーフィンギン説明会)では、18日現在の感染状況は全国の1807例・死亡79人の中で北京は339例・18人死亡に成り、衛生部が15日に公布した同日午前現在の同37例・4人死亡より大幅に上方修正された。張衛生相は3日の第1回「新聞發布会」で北京の患者・死者は12人・3人と発表した

が、解放軍総医院（301 医院）元外科主任 蔣彦永^{しょうげんえい}は翌日に内外の報道機関に内部告発を敢行し、同市内の軍第 309 病院だけでも 60 人の患者を治療中で 5 日までに 7 人が死亡したと暴いた。8 日にこの文書は米国の報道情報週刊誌『時代』^{ニューズ タイムズ}の電子版で速報され世界的に波紋を起し、同日の『中国経済時報』（國務院発展研究中心主催）^{センター}の記事（新華社ネットワーク^{ネット}に転電）でも、後手に回る衛生省の情報公開を非難し国民の「知情権」（知る権利）の重要性を力説した。翌日の『中国青年報』（中国共産主義青年団中央委員会機関紙）に掲載された批判記事は、政府の信用を損なう情報隠蔽と原因の徹底究明を妨害する報道規制の不当に苦言を呈した。不信・不安が高まる中で 10 日の衛生部第 2 回「新聞发布会」で馬曉偉副部長（次官）は、政府発表の数字の信憑性を主張し 9 日現在の北京は感染 22 例・死亡 4 人であると語った。外交部發言人・新聞司副司長劉建超（外務省報道官・副報道局長）^{スポークスマン}も同日に強気に反論し、「中国政府が発表した数字は全て正しい」という断定調の弁護で安全面の安心を促したが、『中国経済時報』の上記記事の題『新聞發言人靠得住嗎？』^{スポークスマン}（報道官は信用できるか）は、『中国青年報』と同じ体制側の新聞から投げられた異論・疑問として民意を反映している。

各省・自治区・中央直轄市の「非典」発生状況は衛生部主管の『健康報』紙（週 5 日発行）に公表され、3 月 31 日現在に次いで 4 月 6 日現在、9 日現在等の続報の掲載は初めての措置であるが、形式的に整った統計の正確性に対する朝野の信頼は最高指導部も含めて高くなかった。世界保健機関^{WHO}は衛生部発表の患者数に軍の病院の患者が含まれていないという見解を示し、翌 17 日の政治局常委会で胡錦濤総書記は感染状況の正確の把握と定期的な公表を要求した。医療を議題とする党の最高意思決定機関の会議召集も開催自体の即日報道も異例であるが、報告の遅れと偽りを戒める胡の警告の真剣さを証明する様に 3 日後に^{あたりようじ}荒療治が断行された。党内要職を失った張文康と孟学農は其々 26 日、22 日に衛生部長と北京市長も解任されたが、其々再任・就任 2 ヶ月未満の高官の失脚は前代未聞で事の緊迫性と党の危機感を思わせる。転換点は康世恩生誕 88 周年に当る（康は満 80 歳の翌日の 1995 年 4 月 21 日に死去）が、副総理まで受けた「渤海 2 号」事故の処分は人命を具にする政争の要素が有ったとしても、国民の生命・社会の安全を犯す重大な人災・不祥事に対する処罰が閣僚にも及ぶ問責制は、88 年の鉄道部長解任を経て今度の衛生部長解任で定着したので歴史の前進の起点と思える。『三国志演義』の「孔明揮淚斬馬謖」（孔明涙^{ふる}を揮^{ふる}って馬謖^{ばしよく}を斬る）の故事に因んで言えば、血も涙も無く宋振明・馬驥祥等を斬った裁決は共和国「演義」で特筆すべき^{ひとこま}1 齣であろう。

1977 年 9 月 28 日に過激組織日本赤軍の 5 人が南亜細亜で日本航空 472 便を乗っ取って、人質の身代金 600 万ドル（1ドル ≒ 266 円）の支払いと獄中の仲間等 9 人の引き渡しを要求した。10 月 1 日に福田赳夫首相は「1 人の生命は地球より重い」と述べて超法規的な措置を決断したが、当日が建国 28 周年に当る中国では前年の毛沢東死去以降の変容として人命尊重の意識が台頭し、79 年「渤海 2 号」沈没の 72 人犠牲に対する重視と高官への重罰は端的な象徴^よと見て可い。

50、60年経っても米国に追い着けない様では「(地)球籍」を剥奪されて了うと毛は56年に述べた¹⁴⁾が、「地球村住民」の資格を指すこの比喩に即して言えばこの意識改革は「在住許可」に繋がる。「ダッカ(バングラデシュでの強行着陸地)日航機乗っ取り事件」の政府の譲歩と対照的に、90年10月2日に福建省廈門発広州行きの廈門航空8301便が広東域内で乗っ取られた後、機長が犯人の台湾行きの要求を拒み犯人が機長の燃料補充の為の香港行きの提案を断った結果、広州白雲山空港に緊急着陸する際に両者の格闘で他の2機と衝突し128人の死者を出した。9時過ぎに血の海と化した現場に李鵬総理が5時間後に赴いたので驚天動地の事と言えるが、燃料の限界及び犯人蔣小峰(湖南省臨澧県物資局開発公司仕入係、21)の無知・頑迷と共に、当時中国で旅客機乗っ取りに対する抵抗・制圧が奨励されていた事も1因と見られる。¹⁵⁾ 奇しくもこの飛行機(機種 = B 737)は88年5月12日に同じ線路で乗っ取られた事が有り、2人の犯人の命令に従って台湾省清泉崗空軍基地に行った翌日に全員が無事廈門に帰れた。「白雲山機場(空港)事件」の惨劇を受けて当局は乗っ取りに対する積極策の推奨を止め、乗客・乗員・機体の安全を優先し国際的な慣例に沿って穏健策を取るよう方針を転換した。「国際接軌」(国際社会の軌道と接続する[世界の常道に乗る])という90年代前期の合言葉は、民用航空業界の乗っ取り対策に於いては建国41周年の翌日を転換点に漸く実現した。

1993年は航空機乗っ取りが空前の21回(11回は未遂)も起き「劫機年」と呼ばれたが、「無能」の汚名を冒しても安全を最優先する対応は常識的な規則と評価の対象に成った。年間2桁の量的な最悪に対して「90.10.2」と並ぶ最も悪質なものは「83.5.5」事件であり、犯人集団が機内に持ち込んだ拳銃で発砲し韓国への着陸を果たした事の衝撃は計り知れない。瀋陽(遼寧省省都)発上海行きの中国民航296便の機長等は頭に拳銃を突き付けられた儘、日本人3人を含む乗客と2人の負傷者を含む乗務員の安全を期して犯行に反抗しなかった。10日に中国人乗客・乗務員全員及び飛行機は上海に帰還し政府要人等の熱烈な歓迎を受け、18日に國務院は「嘉獎令」(表彰命令)で同機乗務員一同の英雄的で機智に富んだ対応を讃え、機長と乗務員一同に其々「中国民航英雄機長」「中国民航英雄機組(乗務員集団)」の名誉を与え、王儀軒機長(43)は後に民航東北管理局副局長、東北航空有限公司董事長(取締役会長)まで出世した。¹⁶⁾ 沈陽中国民用航空局局長は85年4月に同職(77.12～)解任、87年7月に党中央委員(82.9～)除名の処分を受けたが、涉外規則への違反や子女への便宜提供等が原因とされこの件は別に減点材料ではなかった。¹⁷⁾ 国家緊急処置劫機領導小組(国家航空機乗っ取り緊急処置指導小組)の総括通達では、武器の持ち込みを見過した保安面の不備と公安部門の散漫・無力を最大の問題にしている。¹⁸⁾ 銃器窃盗等の罪を犯した犯人集団の拠点瀋陽では同年2月12日に4人殺害事件が起き、犯人王宗坊・宗璋兄弟(30、26)は現場の空軍463病院から逃走し恐怖を各地に撒き散らした。公安部に由る建国後初の懸賞金(上限額2000元)付きの指名手配を受けた「東北二王」は、9月18日に江西省広昌で武装警察に射殺されるまで合計9人を射殺し9人を負傷

させた。4月に司法部長（前年4月就任）から公安部長に転任した劉復之は7月19日に鄧小平から、犯罪者の一網打尽を目指す迅速で大規模の摘発・厳罰運動^{キャンペーン}の展開・持続を命じられた。「我們保証最大多数人的安全、這就是人道主義。」（我々は絶対多数の人の安全を保障する。これが人道主義だ）と言う鄧の意思¹⁹⁾は、政府の最大の責任は人民の生命・安全を護ることだと言う温総理の「7.28」談話と共通する。

1983年「5.5」乗っ取り事件は危機を好機に転じる好例の様に中・韓交流の契機に成り、朝鮮戦争（50～53）で死闘を交した両国は接近の末に92年4月28日の国交樹立に至った。対照的に、犯人集団は乗っ取りの罪に由る監禁を経て84年8月に韓国の特赦で台湾に亡命できたが、厚い礼遇と相当額の黄金を貰った「6義士」の頭卓長仁は先物取引の失敗等で窮乏に陥り、6人組中の姜洪軍と共に91年8月16日に身代金目当ての誘拐をし而も人質を殺害した。翌年逮捕された後2000年に9月22日に死刑が確定し01年8月10日に執行された（2人の歿年は53、41）とは、民進党政権（00年5月20日から2期、各4年）下の結末とは言え、「反共義士」を嬉々として迎え入れて来た台湾当局には不名誉な不始末であるに違い無い。曾て海峡兩岸の双方は相手の空軍操縦士等の「起義投誠」（敵側から自陣営への帰順）を誘致する為に、最高額として台湾が黄金7000両、大陸が人民幣65万元という破格の懸賞金を出していた。1988年9月11日に解放軍は62年7月25日に公表したこの制度の執行停止を宣言し、61年9月15日以来11機の寝返りを釣って来た台湾側も4日後に大幅減額を発表した。「誘降」（投降勧誘）合戦の初成功例から27年経った「9.15」声明の翌年の9月16日に、台湾の繁栄への憧れと「6.4」鎮圧への失望に駆られて蒋文浩中尉（28）が金門島へ飛んだが、従来の4割しか支給しない軟着陆が奏効し両軍間の「叛逃」（叛乱の逃亡）はこれで消えた。²⁰⁾

冷戦終結と同時期のこの変化は無益の抗争や不条理の仕組みを捨てる新思考の産物であり、台湾では54年に中国人民志願軍俘虜の韓国からの「帰順」來台を記念して制定した「1.23自由日」も、李登輝政権下の93年に「世界自由日」に改名され「反共義拳」顕彰の性格は稀薄化された。93年1月17日に中国民用航空界の失墜した重鎮沈図は失意の内に73歳の人生を終えたが、同年に多発した大陸での航空機乗っ取りは台湾に行き着いた場合でも亡命とは認められず、大陸と同じく国際慣例に沿って犯罪として裁かれる様に成っていた。88年5月12日に大陸の旅客機を初めて直接台湾まで乗っ取った2人の犯人は懲役3年を科され、途中で仮釈放され定住を認められたが、台湾目当ての事例が急増した93年には4月6日に成功した2人の犯人は懲役10年に処され、其々97年、99年に大陸に送還された。²¹⁾97年3月10日に高雄発台北行きの台湾遠東航空128便が劉善忠の乗っ取りで廈門に降りたが、5月14日に大陸側は海峡兩岸の赤十字会の『金門協定』（90.9.12）に沿って彼を送還した。台湾側も7月16日に金門島で93年「4.6」「9.30」の乗っ取り犯黃樹剛、韓鳳英を送還し、規定に反して域内に入った相手側の人員や犯罪人・容疑者の送還に関する協定に従う姿勢を打ち出した。解放軍の「投誠」

報奨金制度執行停止宣言の2周年の翌日に締結された「9.12」協定は、7年後の新分野に於ける双方向履行に由って航空安全の面でも歴史的な貢献を残したが、台湾側が呼応した「7.16」は38年に亘る全省戒厳令の解除10周年に当るので興味深い。対岸の裏切り者や乗っ取り犯を歓迎しない態度への切り替えでは大陸の方が先行したが、民主化に於いて台湾は1日の長が有ると言うよりも最低1世代（30年）^{ほど}程進んでいる。

大陸では90年「10.2白雲山空港事件」の大量犠牲で人命優先の対応へと方針が転換したが、83年「5.5」事件の安全策に対する表彰が転機にし得なかったことで遅きに失した感も有る。「劫機年」の10年後の「非典」騒動では人民の命より国の体面を重んじる旧思考が現れ、表面的な安定を演出する為に实事求是の党風を無視して欺瞞も辞さない挙動まで為された。江沢民総書記の保健医兼解放軍総後方勤務部衛生部副部長（少将）等を歴任した張文康は、総書記退任（前年11月）後に中央軍事委員会主席の椅子に居残り続ける江の後ろ盾も空しく、1998年に成った衛生部長の職を失い閑職の中国宋慶齡基金会副主席に就き仕途が断たれた。孟学農の解任は江派と胡錦濤派（共青团系統出身）の痛みの分ち合いであると見られるが、9月に國務院南水北調工程建設委員会辦公室副主任（事務次長）への転任を命じられた後、2007年7月から山西省委副書記を務め08年1月に省長（県知事）兼任まで昇進した²²⁾が、同年9月8日の同省襄汾^{じょうふん}県の鉞^{こうさい}滓^{じょうふん}堆積場決壊・土石流流出の「重大責任事故」（277人死亡）で引責辞職した。前任省長・省委副書記于幼軍^うは07年9月に文化部副部長へ転出し後任部長と目されたが、翌年9月5日に政治局に由る「留党察看2年」（2年間党籍保留の儘で党内に留めて観察する）^{とど}処分を受け、10月9～12日の17期3中総会では中紀委の審査報告に基づいて中央委員（07.10～）除名が決定された。同じく党大会直前に沈図が受けた中央委員除名処分と違って理由は公に開示されていないが、政治的な処刑に等しい党籍剥奪に次ぐ「留党察看」は執行猶予付きの死刑判決と違うものの、この重罰は重用されて来た彼の要職への復帰の機会が恐らく巡って来ない事を意味する。彼は絶望から希望を見出そうと国家図書館の特別室に閉じ籠って読書・執筆に打ち込み、出世作と成る『社会主義四百年』（黎元江と共著、広東人民出版社、1985）を修訂した上で、これを第1・2巻とする『社会主義五百年』の第3巻『社会主義在中国（中国に於ける社会主義）1919—1965』を書き、11年4月に広東教育出版社から刊行した。²³⁾2年半の試練を経て11年2月に國務院南水北調工程建設委員会辦公室副主任に任命され、山西省長の後任孟学農の元左遷先への配属は政界の厳しさを示す皮肉な巡り合せである。

ミニ・ブログ ネット・シチズン^{たいどう}「^{りょうげん}微博蜂起・網民擡頭元年」の星火燎原：開発独裁への警鐘と「親民」強化への要請

約8.7万人の死者・行方不明者が出た2008年5月12日の四川省汶川大地震（M8.0）の直後、地方視察から北京に帰ったばかりの温総理は直ちに被災地に飛んで救助の陣頭指揮を執り、全

国の党政軍民一体の支援活動は共和国史を超えて中国有史以来の規模・氣勢を見せた。19～21日の全国哀悼日には中国史上初めて自然災害の死者の為に天安門広場等で半旗が掲げられ、19年前の「政治風波」中の「5.19」首都部分地区戒厳令発布（翌日実施）とは対照的に、胡錦濤政権が高く掲げた「親民」（民衆に愛しむ）志向の表徴として大衆から好感された。初日の14時28分（地震発生の時刻）に全国民が一斉に3分間の黙禱を捧げた集団行動は、抗日戦争前期の国土防衛と「文革」前期の領袖崇拜以来の「万衆一心」の高揚と言って可い（大勢の人々が心を1つにする意のこの4字熟語は国歌『義勇軍進行〔行進〕曲』にも有るが、1935年に田漢が作詞し聶耳が作曲したこの歌は抗日の為に共闘を呼び掛ける雄叫びである）。1964年東京五輪（10月10～24日）前の新潟地震（6月16日、M7.5、死者26人）とも似て、天災襲来後の8月8～24日に行われた「民族の祭典」（1936年柏林五輪〔8月1～16日〕記録映画〔リーフェンシュタール監督、38〕の題）は、『易経』の卦辞に由る「否極泰来」（否〔凶〕極まれば「泰」〔吉〕来たる）の通りである。

日本では終戦50周年の1995年夏から「第2の敗戦」論が識者等に由って喧伝されたが、同年の「1.17」阪神・淡路大地震（M7.3、死者・行方不明者6437人）の際の社会党・自民党・新党さきがけ連立政権の拙い対応と比べて、汶川大地震を乗り越えて国全体の求心力を高めた共産党政権は強力な統治手腕を示した。彼の悲願達成の「国家的節日」（国家の祝祭日。「民族の祭典」に当る中国語訳）は選りに選って、「吉祥数」の8が並ぶ年（最後の1桁）・月・日・時（夜8時）に華やかに幕を開けたが、「樂極生悲」（楽しみ極まれば悲しみ生ず）と言う様に暗転への伏線が埋められていた。中国で8、6が「吉祥数」と為るのはbā、liùと「発」（fā）、「禄」（lù）との語呂合せが由来で、この事は「発展」「発財」（財成）や「俸禄」を追求する功利意識の強さを物語っているが、新兵器の実験が数度1月11日に行われた事²⁴⁾も「取吉利」（縁起を担ぐ）の要素が有るなら、「天字第一号」（天下の1番目）を目指す願望が設定の1因として考えられなくもない。然様の選好からすれば21世紀の下2桁が11であるこの年も幸先の好い時期に当るうが、天災の試練を乗り切って拳国団結に至った08年の「因禍得福」（禍は転じて福と成る）は、3年後に人災に由って「禍福糾纏」（禍福は糾える繩の如し）の逆方向の変転をもたらした。

汶川大地震の4日後に胡錦濤総書記・軍委主席・国家主席も現地入りし温総理と合流したが、「7.23」事故後は張徳江副総理が現場の善後処理を司り温・胡の連携行動は再現しなかった。6日目に赴いた温は直近の連日の公務活動の報道と矛盾する長い病気を以て遅れを釈明し、異様な言い訳は酷い事故・拙い処理の責任の所在を浮彫にする為かとも穿って見られた。視察・見舞い及び真相究明を約束し安全第一を宣言する会見では張の姿が無かったのも、温が常委、張が委員を務めた政治局内の不協和を想像させる異変の兆しの様に思われる。35年前の「7.28」河北省唐山大地震（M7.8）で世界の世紀最悪の242769万人（公式発表²⁵⁾）が命を落とし、物心

両面の衝撃の余波で毛沢東が9月9日に死去し極左「4人組」が翌月6日に逮捕されたが、2011年の24節気中の大暑（7.23）の激突事故も秋・冬乃至翌春以降の一連の波乱と繋がる。

胡錦涛政権の「以人為本」（人を本とする）の理念は件の粗雑な処理で台無しに成ったが、「7.23」事故は「開歴史倒車」（歴史の趨勢に逆行する）の反面時代の変容をも映している。2008年は汶川大地震被災地に集まった各地の有志の支援で「志願者元年」の名が付いたが、11年はこの事故に関する情報や論評の携帯電話の「短 信」等による伝達・増幅に因って、「民意直播（中継）元年」や「網 民 崛起（擡頭）元年」等の命名が考えられよう。折しも事故の3日前の『人民日報』に『我国網民達4.85億』を題とする記事が載っており、6月末に4億8500万に達した電腦網利用者は年末までに5億を超えようという予測の他、「微博」利用者数が上半期に6311万から1億9500万に急増した動向に焦点が当てられた。²⁶⁾ 気軽な発信手段と為る「微博」は同音（weibo）の「囲脖」（襟巻）で呼ばれたりするが、喉・頸を纏うこの見立てとも同音の「畏波」（畏るべき波を意味する造語）が思い浮かぶ。当局にとって不都合な真実や「微詞」（[隱微な] 批判の言葉）が「網絡空間」で忽ち拡散する勢いは、じわじわし首を締めて来かねない「囲脖」以上の「星火燎原」（燎原の火）の凄味が有る。

毛沢東は中共・赤軍が壊滅寸前の1930年1月5日に林彪宛の書簡で悲観論を打ち消すべく、小さな火花も広野を焼き尽せるといふ意の成語「星星之火，可以燎原」を援引している。初出は明の万曆帝（神宗，在位1572～1620）の首輔張居正の何業山雲南巡撫への返信で、近年の不穏な事態は無能の武官・汚職の官吏及び他所の「奸徒」の流入に起因したとし、激化・煽動の動向や危険を指摘する処にこの8字の警句が出ている。日本語にも勢いが盛んで防ぎ止め切れない様の形容「燎原の火」が有り、2014年10月19日に民主党の福山哲郎政調会長は3閣僚の「政治と金」問題に就いて、疑惑は「“火が無い”どころか燎原の火の如く広がっている」とNHK番組で糾弾した。翌日の小渕優子経済産業相・松島みどり法務相の引責辞任は安倍晋三内閣に打撃を与えたが、「千里之堤，潰於蟻穴」（千里の堤も蟻の穴かに崩れる）と通じる「星火燎原」の恐さは、燎原の火を起して天下を取った共産党には痛い程分り極度に警戒されるのも無理は無い。

「7.23」事故で現れた電腦網の神通力と「網 民」の活用力は先ず救命訴求の発信に在り、メディアが網絡で流した脱線の第1報より2時間余りも早かった当事者の「微博」発信として、追突の4分後に「新浪網友」（新浪網の利用者）「袁小堯」が「D301」の遭難を速報し、居場所の最後尾車輛も「全部停電了!!!」（全部停電してしまっただ!!!）等と非常事態を伝えた。²⁷⁾ 更に12分経った後の電腦通信用仮名「羊圈圈羊」（「羊小屋に羊を入れる」）の「微博」消息は、「求救!」（救助求む!）を始めとする5つの文（文字・符号数は54）は全て感嘆符を用い、温州南駅附近での「D301」の脱線と子供の泣き声があちこちで聞える車内の窮境を告げた。忽ち94125回転送された後に当人は又21時5分の続報で車体の傾斜・密閉状態を伝え、「驚嘆号」（感嘆符）

を使わないものの「救我們」（私たちを助けて）と再び救援を哀願した。²⁸⁾ 同じ7月下旬に起きた唐山大地震の際に国家地震局は技術の稚拙さで震源地を把握できず、窮余の1策で北京から東・南・西・北の4方へ車を走らせて手探りの特定作業を試みたが、2時間半後漸く判明に至った決め手の1つは通信の全面中断に関する電信部門の報告である。²⁹⁾ 今回の早期発信・周知はその長い情報の空白・対応の空転とは隔世や別世界の感が強いが、全国への「第一時間（緊急タイム）生中継」は汶川大地震の時に比べても進んでいる。

2015年1月9日、2人のテロリストがパリ郊外の印刷工場に人質を取って立て籠っていた数時間の間に、流し台の下に隠れた従業員が携帯電話の電子郵便で警察に救助を求め状況を通報していた。中国の発明とされる印刷術を使う活字文化の作業場からの発信は文明の進化を思わせるが、インターネットは「活用」の字面の通り活路を切り開く為に用い又生活必需品の性格を備えており、携帯は中国でも「7.23」追突の直前～直後に利用した乗客が居た³⁰⁾様に日常必携の部類に入る。14年に全米の空港で充電できるコンセントを求めて構内をうろつき回る「電源難民」が大量発生した³¹⁾が、20世紀の文明社会に電気が欠かせないのと同じく21世紀の世界はインターネットとは切り離せない。01年に米国の投資銀行ゴールドマン・サックスが囃し出した「BRICs」勃興の夢物語では、中国は経済規模と急成長の実績に由って伯刺西爾・露西亞・印度よりも期待されていたが、表に出難い実態としては新興国に有り勝ちな産業や社会生活の基盤の整備不十分の所為で、インターネットを支える電力供給さえ儘に成らない処が少なからず有り「電気難民」が多数居る。

2013年3月に7代目の総理に就任した李克強は遼寧省委書記在任中（04.12～07.10）、経済成長の判断指標として電力消費量・鉄道貨物輸送量・銀行融資を重視すると明言した。地方政府の域内総生産崇拜の影響や虚偽報告の余地が無いこの3指標は実態を好く反映できる為、英国の『エコノミクス』誌は10年に「李克強指数」の名で中国の成長率の評価に用い始めた。酸素・動脈・血液の様な3要素の中で電力は「7.23」事故の舞台である鉄道と同居するが、中国版新幹線の華々しい開通の前後にも電気の無い地帯が幅広く数多く陰に潜んでいた。世界2位の経済大国に成った時は四川だけでも112万人が「無電」生活を強いられており、³²⁾10年の全省総人口（常住）8042万（住民登録数は8998万）の1.4%に過ぎないものの、世界人口ランキングで153番目と為る東ティモールと略同じなので看過せない大問題である。同省は「天府之国」（土地が肥沃で物産が豊富な地域）の美称を文句無く独占しており、10年に国際連合教育科学文化機関から亜細亜初の「美食の都」の称号が授与された成都が省都であるが、毛沢東時代の中期以降は失政と天災に由って大規模の食糧難を幾度も体験させられた。趙紫陽の省委第1書記（1975.10～80.3）としての最大の政治業績はこの難局の打開であり、3代目の総理（80.9～87.11）に抜擢されたのも政策の調整・活用の手腕に因る処が大きいの。四川は改革・開放後「温飽問題」（衣食の基本的な保障）の解決で全国の先頭に立ったが、文化

的な生活の糧と為る電気は1/3世紀（「四半世紀」に因んだ造語）後も不足している。

「無電村」が多い四川涼山彝族自治州内の金陽県の複数の小学の教師たちは2012年に、米国籍華人や隣省有志の寄付で太陽熱利用簡易装置（1個100元〔約1300円〕）を入手した。彼等が感激したのは照明可能の他に携帯電話の充電の為他所に行かなくても可いことも有る³³⁾が、それまでは夜の暗闇には我慢できても携帯の充電は省けず面倒を厭わなかったわけである。電灯もテレビも無いのに先ず携帯を持ち連絡や情報獲得に努めるのは倒錯の様に見えるが、米国の未来学者トフラーの『第3の波』（1980）の理論に即して考えれば興味津々である。人類はこれまで農業革命（農耕を始めた新石器革命）と産業革命を経験して来ており、これから次の大変革の波として情報革命に由る脱産業社会が押し寄せると著者は唱えたが、先進国も途上国も情報化時代の到来に際して同じ出発点に立つものであるという示唆は、趙紫陽等の変革派を鼓舞させこの大波に乗って落後から脱出しようとする決意を促した。日本と同じく95年が「インターネット元年」と成った事は「第3の波」の特殊性を思わせるが、情報革命で急追する並々ならぬ努力とは裏腹に日本より数十年遅れる処が依然として多い。

辛亥革命の導火線の1つは1911年5月に朝廷が下した粵漢・川漢鉄道国有化の命令であり、広東—漢口（湖北省省都）・四川—漢口鉄道の建設に資金を投じた民間への補填が無い為に、四川で3省中最も激越な「保路（鉄道を護る）運動」が起き当局の鎮圧で武装蜂起が勃発した。中国の鉄道の始まりは光緒2年（1876）に英国の怡和洋行が敷設した上海—呉淞^{しやう}鉄道で、外国企業が無断で作ったこの線路（全長14.5^き）は翌年に清朝に買い取られ解体された。82年に開通した官製第1号の唐山—胥各莊^{しよ}鉄道（9.2^き）は開鑿産の石炭を運び出す為で、産業専用の唐胥鉄道でも日本初の東京新橋駅—横浜駅間（29^き）の開通より10年遅れた。初めて自国の設計に由る京張（北京—〔河北省〕張家口）鉄道（201.2^き）の開通（1909）後、西南の四川は華中の湖北、中南の広東と共に朝野一体の鉄道建設熱^{フーム}の中で先鞭を付けた。川漢鉄道が政治干渉で流産した後の革命で同省から民国・共和国の開国元勳が輩出したが、その中の鄧小平が進めた改革・開放の「第2の開国」後も四川の貧困一掃は出来ていない。同じ涼山彝族自治州の冕寧県内の西昌衛星発射中心^{センター}（70年建設決定、82年運用開始）では、84年から2013年末まで国内外の人工衛星を84回打ち上げ世界的な名声を欲しい儘にした。13年12月2日に空に昇った月探査機「嫦娥3号」は12日後に月への着陸に成功したが、人類史上1976年8月18日のソ連「ルナ24」着陸以来の快挙の起点と成る同地の周辺には、最先端技術を満載した「花火」の昇天とは対照的に暗い「電欠地帯」が沢山散在している。

米国の社会心理学者マズローは1943年の「欲求階層説」で人間の欲求を5段階に分け、その「生理の欲求」「安全の欲求」「帰属・感情の欲求」「自尊・評価の欲求」「自己実現の欲求」は、次元の低い方が満たされて始めて次の高い次元へ上がって行くものとしている。建国31年目に「渤海2号」沈没事故が起き責任者の高官等に対する重罰が下された事は、生存に関する最低

限の欲求が一応満たされ安全の欲求が突出して来たことも背景に有ろう。31年後の「7.23」追突事故の時の「微博」普及は帰属・感情欲求が高まった結果とも思え、発信者の自己満足は「自尊・評価」「自己実現」の欲求実現に繋がる節も何処と無く有る。涼山の「無電村」に射し込まれた太陽熱利用の光で照明及び携帯充電は一挙に出来たが、電灯→テレビ等の電器→携帯電話という順次の進化が遅れ馳せながら一気に実現するとは、「第3の波」に推された中国の前世紀に対する格段の進歩を物語る事象として捉え得る。初級の電氣化と中級の情報化の同時達成は積年の供給不足・欲求不満の解消であると共に、携帯の電源を確保する1環として初歩的な電氣導入を求める人々の欲求の重層を窺わせる。「電源難民」に因んで言えば今日の中国の大衆は受難の民の「難民」(nànnín)と違って、全段階の欲求を持ち合せ対応し難い民衆の「難民(nánmín)」(造語)なのかも知れない。

救助された項瑋伊の母親は事故の6日前に「微博」で育児日記風の雑感を断続的に綴り、愛情が滲み出る一連の眩きは直前の19時17分に発せられた20字の愚痴が最後と成ったが、娘の救出後電腦網上で注目を浴び2日余りで4万7000回転送され人々の琴線に触れた。³⁴⁾父親が2005年に立ち上げた国語教育交流ウェブサイト「語文軒」は同僚に引き継がれており、個人「微博」(名称=「閑坐不談語文」[閑坐して国語を語らず])は永久閉鎖と成った³⁵⁾が、妻の「@——成長回憶(回想)録」(上記「微博」の名)の文及び夫妻の写真・略歴等と共に、ネットワークでは管理者が削除せず「網民」に由る流布が続く限り半永久的に残って行くであろう。「網站」の「站」は「立つ」「停留所。駅」の意が有り字形も立脚(の地)を連想させるが、「人過留名」(人は立ち去ると名を残す)と言う「名の文化」に由る中国人の究極の願望は、下に続く熟語の「雁過留声」(雁は飛び去ると声を残す)との対を字・義俱に体现する様に、名声の無い人でも存命中も死後も「名・声」を残せるネットワーク空間に由って手軽に実現できる。

ネット上の項・施夫妻の発信と関連情報は記録・遺言・形見・名残等の性質に止まらず、子供や双方の親を含む遺族の断腸の思いを思わせ事故への痛恨を深める増幅の働きも有る。人は去った(又は逝った)後には名声を残さなければ成らないという意の上記熟語に対して、類似の「虎死留皮、人死留名」(虎は死して皮を留め、人は死して名を留む)は、野獣の王者である虎は死後も皮と成って珍重されるのと同じく、人はその死後に残した名誉や功績で評価される、という功名の価値及び功名心の正統性を説くものである。更に連想される「死諸葛走生仲達」(死せる諸葛、生ける仲達を走らす)は、諸葛亮(孔明)が陣中で病歿した後に部下の姜維等は遺策に由りその死を隠して行動し、魏の統帥司馬懿(仲達)が率いる軍を退却させたという234年の故事に由来する。この熟語は死後も威名を響かせる様な優れた人間の凄さの形容にも使われるが、恰度1700年後に始まった中国工農紅(赤)軍(中共軍の初代名称)の「万里长征」と共に、『孫子兵法・計篇』の「兵者詭道也」(兵は詭道也)を実践した情報操作の妙も感じられる。「7.23」事故後の当局の対応は死者の遺恨と生者の義憤に由って走らされた処

が多々有るが、群衆の情報発信の威力は「雁行」「成虎」（虎を成す）の見立てで考察すれば特徴が実感できる。

「小伊伊」は温州市医学院附属児童病院で温総理の見舞いを受けた事で益々注目されたが、翌月14日に叔父項余遇はネットワーク上の鉄道部宛の公開書簡で両足の切断を伴わない治療を要請した。その「微博」発信は当日の夜8時までに40432回転送され8818件の論評が寄せられたが、書簡と反響を報じた翌日の『南方日報』（中共広東省委機関紙）の記事³⁶⁾も声援を成した。鉄道部と衛生部が直ちに其々専門家集団を北京から派遣したのは圧力への対応に他ならないが、救命・究明等の訴求で揮ったインターネットの魔力は1世代（30年）前では想像も付かなかった。唐山大地震の直後に開滦炭鉱の職工4人が救急車を飛ばして150^キ以西の北京に直行し、中南海（党中央・国务院の指導部所在地）の紫光閣で副総理等に実態を報告できたが、道中の困難を排して辿り着いたのは発生（未明3時42分53秒）の4時間半の後である。上半身が裸で手に血が付いた儘で国务院接待站（応接所）の正門まで駆け付けた彼等は、非常事態の故に通常では門前払いに遭う様な面会要求が許可され且つ大いに感謝された³⁷⁾が、インターネット時代の中央への直訴は制約を気にせず送信鈕を押せば瞬時出来る様に成っている。毛沢東時代の1960年に河南省信陽地区で起きた大飢饉を中央や省委に告発しようとした人々は、郵便局が地元の高官の指示で手紙を検閲し約12000通の手紙を発送しない様にした為に、報復を覚悟の上で封鎖を突破して首都や省都へ直訴に行くしか声の届け様が余り無かった。³⁸⁾ 公民の通信の秘密は共和国初の憲法（54）の第90条で法律に由って守られると定めてあるが、暗黒の「文革」が襲う前にもこの様に憲法所定の保護すべき諸人権と共に蹂躪されていた。半世紀後にはインターネットでも個人の通信に対する当局の検閲や妨害は不可能ではないものの、従来の通常郵便物と違って電子発信は物理的にも抑制・遮断することが至難の業である。ネットワーク上の公開陳情等は確実に訴求先に届くしその目に触れる前に多数の人が見られるので、衆人環視の重圧の下で当局は情報の封鎖も受付の拒否も難しく緊張感を強いられて了う。

汶川大地震後の全国哀悼日の初日に全国民が一斉に黙祷を捧げている14時28～31分の間、本土でGoogleの検索量は0を記録し国の呼び掛けに応じない人が居ない事の傍証と成った。³⁹⁾ 慰霊の為の異例の現象が美談にされたのは普段の利用が非常に多い事の裏返しでもあるが、その時に已に現れた社会の「インターネット依存症」の受動的な情報吸収が主と為る傾向と比べて、3年後の「7.23」事故の際には「微博」の発達と相俟って発信型の活発な利用が際立った。その典型例として前代未聞の高額「民意捐獎」（民意寄附・報奨）活動が話題を集めたが、経済特区の実業家が「微博」で展開した奇想天外の新機軸は内容・規模俱に画期的である。7月26日10時50分、「珠海協政委員陳利浩」名義の「博主」は不特定多数の「网友（ネットワーク上の友人）」に対して、救助を堅持した邵逸戎に敬意を表しその「記功」（功績の記録。「記過」の反対）を支持するよう要請し、この送信文が1回転送されると自ら1元を「小伊伊」に寄附することを

約束した。この「愛心（愛の心を込めた）^{ミニ・ブログ} 微博」の訴求は有効期限の24時間内で907 882回転送され、翌日の締め切り後の11時21分に陳は寄付額を1 072 417.20円で確定することを公表した。内の100万と救出時の「7.24.17:20」に因んだ端数は其々項瑋伊と邵隊長に差し上げ、邵の上司に百万弱の「^{ネット・シチズン} 網民」に由る彼の為の「請功」（功勞の記録〔論功行賞〕への要請）を伝えることを宣言した。⁴⁰⁾

陳利浩は遠光^{ソフト・ウェア} 軟件 股份（株式）有限公司董事長（会長）、九三学社（1946年に創設し文教・科学技術界の高・中級知識人が主体と為る政党）中央委員会人口・資源・環境専門委員会副主任、広東省政治協商会議特別招聘委員、珠海市政協常務委員であるが、諸「民主党派」も超党派の「政治協商会議」も実質的に中共の翼賛団体と化している中で、「党外人士」として経済力を武器に言わば「言説特区」で輿論形成の署名集めを仕掛けた。その「独出心裁」（独創的な発想や方法を持つこと）は字面に「独裁」を含んでいるが、敢えて抗命した特警隊長への声援の募集には当局の人命軽視に対する批判も込めてある。唐代の文学者杜牧は『阿房宮賦』で秦始皇が建てさせた大宮殿の浪費と無意味を諷刺し、鑑戒の言の中に「嗟乎！一人之心，千万人之心也。」（嗚呼、^{あ あ いち にん} 1人の心は、^{せんぼんにん なり} 千万人の心也）と有る。^{かみ} 上1人の天子の心は下千万人の民衆の心に影響を及ぼすので秦王の贅沢志向は部下に追随され、阿房宮は人民から^{りやくだつ} 掠奪して来た物を惜しみ無く使って出来た豪華願望の所産に他ならない、という旨の嘆息である。感嘆符が付く「嗟乎」の字形・語義に因んで「7.23」の蹉跌と陳の呼び掛けを考えるなら、1人の民間人の運命・挙動・心情は千万人の大衆の心を動かし得ることが思い知らされる。

「一呼百応」（1人が呼べば100人が応じる）という形容の9 000倍もの呼応・共鳴は、1日の86 400秒で割ると平均1秒で10回転送された計算に成るので物凄い反響と言える。救出時刻と寄附金の万元単位以下の端数との対応を工夫した発起人の氏名に暗合する様に、その言説（陳べること）は利・徳の連動・相乗も有って^{こうだい} 浩大な「声勢」（氣勢）を作った。影響力が有る人物の訴求力を誇張する熟語の「登高一呼」（高い処に登って呼び掛ける）は、下に続く「衆山呼応」（周りの山々が呼応する）や「応者雲集」（応じる人が雲の様に集まる）と共に、呼び掛けに応じる人の多さに譬える「一呼百応」の意を成すが、「百応」を博す「一呼」は従来「振臂高呼」（腕を振り上げて声高に叫ぶ）の^{こわだか} 形象もが有る。^{イメージ} 網絡上の発信は「振臂」の必要が無く「指弾」（指差して糾弾する）の字面の様に指で弾けば出来、^{ネット} 満天下へ発信し得る^{インターネット} 電腦網の利用は「制高点」（軍事上の拠点と為る高い処）の占拠に等しい。特警隊長を功勞者に推挙する^{ネット} 網絡「民意捐獎」は「推特」（^{ツイッター} tuītè）の字・義とも重なるが、^{ウェブ・サイト} twitter（短文投稿情報体系）のこの音訳は特定の言説の「推出」（世に出す）を表す妙も有る。

2006年に米国で発祥した同仕組みの名は「囀り」「興奮」「ペラペラ喋る」等の多義を持ち、「眩き」が定訳である日本語の中国語と共通の「囀」の「口+轉」の形は口コミの転送に符合する。転送を言う中国語の「転発」は書類を管轄の機関・部署に回す意や転載する意も持つが、昔は

官庁等での使用が多く今は民衆が「話語権」(発信権。言説主導権)の行使と共に気軽にしている。「@羊圈圈羊」の中の「圈圈」(juànquān)は「家畜飼育の柵・囲い・小屋に入れる」意であるが、名詞+動詞のこの2字と同形・異読(quānquān)の方は動+名なら「○を画く」意に為る。決裁や閲覧済みの印に自分の氏名欄に丸印を付ける「圈閱」の流儀は建国後続いており、「病夫治国」の見本と成る末期の毛沢東も震えた手でしたり秘書に代行させたりしていた。1人の心で千万人の心を操れる独裁時代では独りの決裁に他の要人も従うしか無かったが、人民に至っては「羊圈里圈的羊」(羊小屋に閉じ込められた羊)の如く従順を尽していた。中共の「経済戦線」の長年の責任者陳雲(党中央副主席・副総理等を歴任)は1982年に、適度の規制・自由を兼ね備えた計画経済+市場経済の結合を「鳥籠経済」の名称で唱えたが、鄧小平時代以来の「鳥籠政治」(造語)の下で大衆は最早「沈黙の羊たち」ではなくなった。「鳥の囀り」(twitterでの発言を指すtweetの語義)が活発化した昨今のネットワーク空間では、検閲・遮断乃至強制閉鎖の「鳥籠」が一応有るものの億万人の争鳴を到底制御できない。

毛沢東は1957年に党風整頓の為に党内外から意見・建議を募集する姿勢を一旦見せた後、その「百花斉放、百家争鳴」の理想を超える強い勢いで噴出した党への批判に焦りが募り、間もなく「口・轉」を体現する様な食言の転向で異論を唱えた大勢の人々に鉄槌を下した。「槍打出頭鳥」(頭を出す鳥を鉄砲で撃つ。出る杭は打たれる)という警句の通りであるが、当初の寛容は「陽謀」(「陰謀」を振った毛の造語。堂々たる謀略の意)だとする彼の放言は、「圈套」(罟)を認めた事で信用失墜を招いた反面その想定外の事態の衝撃を示している。「7.23」事故後の6日後に中宣部が媒体の報道とネットワーク上の言説に緊急規制を掛けたのも、twitterの語義に有る「詰る人。嘲る人」の大きな「圈」(輪)に仰天した所以であろう。「民意捐獎」の発起人陳利浩が属する九三学社は44年の民主科学座談会(於・重慶)が前身で、中国戦区に於ける日本の降伏(45.9.3)を記念して「5.4運動」27周年の日に成立したが、現代史の起点と為る「5.4運動」の民主・科学への追求は毛沢東時代では大きく阻まれた。「反右派闘争」で「右派分子」にされた552973人は81年までに略全て名誉回復と成ったが、容赦されない96人中⁴¹⁾の儲安平(『光明日報』編集長)は九三学社宣伝部副部長であった。彼が中央指定の「5大右派」の内に入ったのは「(共産)党(独裁の)天下」を批判した所為で、6月1日に党中央統戦部召集の第12回整風座談会でのその発言が翌日[上海]『文匯報』に全文掲載されると、毛は強い刺激を受け8日の『人民日報』社説『這是為什麼?』(これは何故だ)を執筆し反撃に出た。全国の主要紙が揃って転載する中で『文匯報』『光明日報』だけが独立系らしく無視したが、日本占領・国民党統治下でも正義感を貫いた『文匯報』の編集長徐鏞成は「右派」にされ、各民主党派機関紙『光明日報』は後に執行部が改組され82年には中共中央の傘下に収められた。

中国政治協商会議「共同綱領」を政治綱領とする九三学社は中共の「衛星政党」と言われるが、「兩彈一星」(核爆弾・誘導弾・人工衛星)事業の功臣に成員が多数居る事が象徴する様に、直

近の社員数（2012年6月30日現在で132,639人⁴²⁾）は共産党員の0.15%に過ぎないものの、知的な水準の高さや社会的な貢献の大きさ、著名人の多さ等で独自の強み・重みが有る。社員数の基準日と中共が前年末の党員数を発表する「党慶」前日と同じなのは「衛星」らしいが、陳利浩の「民意捐獎」は鉄道部糾弾の急先鋒を為す[広州]『南方都市報』と提携した処に、54年前の同社要人儲安平と在野又は都市の有力紙との連携「反逆」と似た構図が見られる。宗派主義や党と民衆の關係の軋みの根源を「党の天下」に帰す儲の喝破は痛い処を突いたが、陳の募金も「民依」（民が^{したが}依う。同音の「民意」[minyì]^{なぞら}）に擬えた造語）を好む中共にとって、独裁体制に風穴を開ける様な「網^{ネット・シチズン}民^{ネット}社会」の「網絡民意参政」の脅威を覚えるものであろう。1人の実業家が「7.23」事故の直接損失総額の0.55%に相当する大金を寄付した事よりも、「^{ミニ・ブログ}微博」上の呼び掛けが1日で90万件も集めた「跟進」（後ろに付いて進める）数が凄まじい。

項余岸は7月15日に杭州へ行く高速鉄道列車の中で娘の姿を撮影し「^{ミニ・ブログ}微博」で送ったが、8日後に帰郷の途中で不帰の人と成った後はその数枚の写真は3日で約22万回転送され、4万点強の論評⁴³⁾は「^{ネット・シチズン・グループ}網民^{ネット}群体」の「互動」（相関・連動）の途轍も無く大きな規模を示した。「途轍（筋道。道理。途方）・無」の字面は途方も無く轍も無い無軌道の形象をも帯びるが、発信者も想像・制御し兼ねる^{ネット}網絡情報流は「交通整理」が効かぬ^{もろは}両刃の劍の性格を持つ。「雁過留声」に因んで言えば「頭雁」（群れの先頭を飛ぶ雁）及び続行梯団の^{ていだん}声・^{こえ}勢が^{いきおい}大きく、^{かしら}頭と後ろの斜めの2列で「人」の字の形を成す雁行は人本・人道の理念等を連想させる。民主主義の本質や威力としても卑俗に見られる数の力は「虎死留皮」に引っ掛けるならば、「三人成虎」（3人は虎を成す）という『戦国策・秦策三』等に見える^{たとえげなし}寓話を思い浮かべる。3人の人が言えば居ないはずの虎も居る様に信じられて来るといふ様な風説の恐ろしさは、^{ネット}網絡上の「留言」（書き込み）と「流言」の同音・同声調（líuyán）にも暗示が感じられる。

良心的な担当者が生存者捜査終了の指示を無視して女の子を救出した事で世論が沸騰し、^{スポークスマン}鉄道部發言人はこれに対する見苦しい詭弁の中で他人事の如く「生命の奇跡」と称した。7月31日の『南方都市報』に「他媽的“奇跡”!!!」（糞っ垂れの「奇跡」!!!）と題する論評が掲載されたが、^{メディア}報道媒体が中央官庁を公然と罵倒するのは建国後61年の間に未曾有の事である。英語の^{ファック}fuckに当る「国罵」（[中]国の代表的な罵語）の「他媽的」が見出しに踊り出たのも、表現の自由に対する制限へ反旗を翻す意味合いが有り中共の検閲下では前代未聞である。「^憤憤青」（英国の1950年代の文学流派「怒れる若者たち」の訳「憤怒的青年」の略）に因んで、この「^{憤情}憤情」（憤怒の感情）は「^{憤情}群情激憤」（皆の感情が激憤に化す）の代弁と言えよう。記事は「追問 処理為什麼会如此草率」（詰問 処理は何故こんなに大雑把だったのか）・「^{反思}反思 必須打破鉄道部的壟断」（反省 鉄道部の独占を打破しなければ成らない）の2部構成で、毛沢東が起草した「反右」社説の題にも有る「^{なぜだ}為什麼」の問い詰めは紙上喚問に他ならない。他の^{メディア}媒体でも使われている「追問」（zhuīwèn）⁴⁴⁾は「^{追尾}追尾」（zhuīwěi）に引っ掛けてあるが、発音表

記がウェブと重なる「微博」の短文投稿がこの問題記事の大半を占めた主役である。これ程惨烈な事態と鉄道部の拙い処理に対して只「他媽的！」で我々の見方を示したい、と冒頭で短い叱咤を掲げた記事の次の2節は全て各3人の「博文」（「博客」文章）である。

「微博」は140文字・符号以内の制約で同音・同声調の「微薄」の様に極僅かであるが、無数の細やかな囁きは1件1件皆「微不足道」（極僅かであるに足りない）とは限らない。「詰まらないことを）早口で喋る」というtwitterの装いの中の「詰」の字に即して言えば、上記の「詰問」は逆に「足道不微」（造語。些少ではないと十分に言えるの意）の感が強い。発信の「天量」（天文学的な量）で恒河沙の如く壮観な情報の大河・沙漠が出来上がるが、ネットワーク上の「圍觀」（取り囲んで見る。注目）も同音の「微觀」（微視）の次元を超えている。1人の「博主」に100万の「聽衆」が付いていれば党への「万衆一心」を削ぐ恐れが有り、微々たる囀りも共鳴・共振を起すと鮮烈な躍動感の増幅で強震の様にびびられかねない。新聞の目玉にも成る「微博」は「無微不至」（至れり尽せり）の字面の様に到る処に行き届くが、字面に「反思」を含む反逆の思想の拡散・加勢は支配者を脅かす力が隠し持たれている。当局がメディアの事故報道を規制し約5億の「網民」の発信への監視を強化した動機として、「微博変革」で大衆の不満・欲求が噴出し鎮めることが出来なくなる懸念が有ろう。中華民国の「国父」孫中山は4億の中国人を「一盤散沙」（皿の上に散乱した砂）に譬え、ナポレオン1世（仏蘭西第1帝政の皇帝）は「眠れる獅子」中国の目覚めを予言したが、13億強の国民は「散沙」の儘でいるとしても「目覚めた獅子」に成るとしても治まり難い。起るべく起った「7.23」事故は地下の岩盤の歪みが限界に達した故の地震とも似ており、怒るべく怒った内外の反響は急激な変形を更に解消する余震の様に沈静化の一環でもあるが、瓦斯抜きをも許さぬ言論封殺は一層「瓦斯」を溜め込んで爆発の危険性を高めて了った。

中共成立90周年に巡り合せた「天数」：「7.23」事故に始まった「新常态」と「新非常態」

阪神大地震で長田区の被害が突出した事は天災の場合にも有る経済格差の例と成るが、汶川大地震の震源地は阿壩藏族羌族自治州に属し経済格差と少数民族の問題が絡んで来る。「7.23」事故が起きた温州は改革・開放後の「資本主義化」の温床と見られて来ただけに、今度の「超特急」の転落は鄧小平・江沢民・胡錦濤時代の光の反面の影を浮彫りにしている。汶川大地震の翌年に民政部の主導で毎年5月12日は「防災減災日」と定められたが、関東大地震（1923年9月1日、M7.9、死者・行方不明者10万人余り）に因んだ「防災の日」が連想される。関東大地震・阪神大地震と並ぶ20世紀日本の3大自然災害の1つである伊勢湾台風（59年9月26日に潮岬に上陸、死者・行方不明者5000人余り）の翌年に制定されたこの記念日は、台風の襲来が多いとされる「二百十日」（8月31日～9月1日頃）をも念頭に置いて、災害へ

の備えを怠らない様にといい戒めの寓意が込められているものである。49年前の日本を真似た「防災減災日」の制定も汶川大地震の歴史的な重みに数えられるが、「7.23」事故は奇しくも中共第1回全国代表大会の開幕の^{ちようど}恰度90年後に巡り合せたので、「超高齢」の90歳代に突入した党の行方を占う「拐点」（転換点）として意味深長である。

初回党大会は上海で秘密裏数日開いた後に摘発を避けるべく浙江省嘉興に会場を移したが、「7.23」事故は浙江の域内で同省と福建省の間を走行する列車同士が激突したものである。翌年総書記に就任した習近平は福建、浙江、上海の党委員会責任者を順次務めた事が有り、地域的に重なるこの奇妙な偶然も「7.23」事故と中共党史との因縁の傍証と成り得よう。「1大」開幕日は当事者の記憶の曖昧さや食い違いに由って定説の無い状態が数十年も続き、1979年に漸く邵維正（解放軍後勤学院政治教員）の考証で7月23日であると特定された。81年に中央党史研究室編『中共党史大事年表』（人民出版社）で公式に「7.23」を党の誕生日と定めたが、38年に毛沢東の発案で決められた「7.1党慶（建党記念日）」は中央の意思で変えてない。⁴⁵⁾ 1を吉とする安直な虚像の裏の「7.23」の真実は邵が表彰された後も周知されていないが、汶川大地震の「5.12」に比べて特筆されることが少ない高速鉄道追突・転落の「7.23」は、指導部の世代交替が予定されている第18回党大会の前年に起きただけに象徴性を持つ。

邵の貢献は中央の党史・理論工作の^{おおごしよ}大御所胡喬木（後に政治局委員 [1982～87]）に激賞され、2等の勲功を授与され以後党史研究・政治理論教育の実績で教授、専門技術少将に昇進した。毛沢東の長年の政治秘書（41～66）胡も興奮を禁じ得なかった「1大」開幕日の確定は、誕生日未詳に付け込んで中共を「私生児」と貶す敵の中傷を封じる点でも意味が大きい。⁴⁶⁾ 「1大」開幕日と^{ちようど}恰度90年後の「7.23」事故との見えざる「天数」的な関連を物語る様に、後者で奇跡的な幼児救出の最大の功労者と為る邵曳戎温州市特警支隊長も同じ姓である。「邵」は中国の姓の中で使用者数が最高で83位、漢族（全人口の約92%）の0.24%（87年の研究成果。以後別々の調査に由る2006、07、13年の発表では其々84位、90位、91位）⁴⁷⁾ に過ぎないので、理論上16万分の1の確率しか無いこの時空・領分を超えた巡り合せは神秘的な暗示を含む。名前中の極めて珍しい「曳」は車内の生存者を引っ張り出す行為で霊験さえ感じられるが、兵器・軍事・軍隊の意の「戎」との組み合わせから軌道^{レール}を敷き伸ばす鉄道兵へも連想が飛ぶ。

邵錫水（1933～）元温州市司法局長、公安局長（84～85、～86）を父親に持つ彼⁴⁸⁾ は当時40歳代で、「曳・戎」は名付け親の意図に関らず毛沢東時代の「先軍」（軍事優先）傾向に妙に暗合する。「警2代」（2世警官 [公安・警察関係者]）邵曳戎のこの伝説的な「善能」（善^{パワー}の能量）は、解放軍もこの文脈では鉄道建設や災害救援の多くの場面で発揮し絶大の貢献をして来た。53年9月9日に中央軍委が設立を決定し翌年3月5日に司令部が立ち上がった鉄道兵は、82年の中央「12.6」決定に由る鉄道部への編入・解消まで最多で40万人を擁す時期があった。初代鉄道部長の^{とろ}滕代遠（49～65）は建国時の軍委鉄道部長・鉄道兵団司令官兼政治委員で、

2代目（～70）の呂正操は58年に鉄道部長代理兼軍総参謀部軍事交通部部長に任命され、65年の部長就任時に鉄道兵で第1政委・党委第1書記を兼務したので、鉄道兵の設立が決った直後に第1期全人代初回総会（54.9.15～28）で誕生した鉄道部は、2人の軍人（呂は上將、58年から病氣療養に専念した滕は軍の階級が授与されないものの軍歴が長い）の指導の下で、軍・民の密接な関係を体現する様な母体の一部を為した鉄道兵と兩輪一体の關係に在った。「7.23」で繋がる「兩邵」中のもう1人の名は正義・「正確」（無謬）の維持を連想させるが、彼に由る中共の「出生証明」の発見は邵曳戎等の生存者捜査と同じく困難な作業であった。1大開幕日の確定で「私生児」の中傷が消えたのに対して女兒発見は別の「中・傷」を残し、車中の負傷者の徹底確認が無い儘で車体を弄ろうとした事は中共の「精神創傷」を増やした。「6.4」鎮圧と「7.23」事故に由る軍と鉄道兵所縁の「鉄道王国」の信用失墜は惜まれるが、「5.12」大地震は北京五輪の「好事多磨」（好事魔多し）と中国の多難を思わせる試練だとすれば、「7.23」事故と処理の不手際は党・国家の劣化及び統治の危機に対する警鐘の様に思える。

死者数が「7.23」と建国後歴代7位に並ぶ1993年7月10日の鉄道事故は河南省で起き、北京発成都行き163列車が新郷市内の南場—七里營区間で2011貨物列車に追突し、乗務員32人死亡・11人負傷、乗客8人死亡・37人負傷の惨事と成った。「7.23」惨劇は負傷者数がこれの3.6倍に相当し死者の殆どが乗客なので一段と酷いが、死者数が並列と為るだけに前者の被追突車の番号は18年後の被害の予告の様に不吉である。新郷七里營は1958年「大躍進」の中で農村「人民公社」の発祥地として知られており、毛沢東が現地視察で「人民公社」の看板を見てこの名称を褒めた事が全国普及の契機である。視察日の「8.6」は「吉祥数」の組み合わせなのに人民公社制度下の農村貧困の発端に成り、同じ「吉祥数」の8（「発」）が続く88年も鉄道業界の事故続発の「大殺界」だけでなく、8月に物価・賃金体系改革の強行突破で猛烈な通貨膨脹と社会的な不安が惹き起された。他方、追突車の番号163は「一路散」との語呂合せ（yīlùsǎn と yīlùsǎn）で縁起が好くないが、「2011 ← 163」の追突は今回の同じ7月の「一路（中国語の意＝道中）散る」に暗合する。毛の生誕100周年に当る1993年に人民公社誕生の地の附近で「7.10」事故が起きた事は、死者同数の「7.23」と結び付ければ毛の呪縛やその時代の負の遺産を感じずにはいられない。

1958年8月17～30日の政治局拡大会議（於・河北省北戴河）では「大躍進」の重点として、大規模な鉄鋼生産運動の展開と人民公社（農村の行政・生産・社会基層組織）の設立が決定された。全国民を巻き込ませた「大煉鋼鉄」の蟹気楼的な実験は経済の均衡を崩し大衆を疲弊させ、理想郷に成る心算の人民公社も分配の平均主義による生産意欲の低下等の弊害を抱え続けた。「大躍進」失敗の結果として59～60年に全国的な飢饉で1500万人以上が栄養失調で死亡し、餓死者が全国で最も多い1級行政区は正に人民公社の祖型と公認第1号が出た河南である。58年4月に同省遂平県の村落に「共産主義公社」が出来た後の七里營公社は正統に成ったが、「人

民公社」の名称の公式採用を毛に進言し⁴⁹⁾ 8月に省委第1書記に昇任した呉芝圃は、大量の「非正常死亡」を作り出した「失政犯罪人」（「戦争犯罪人」に擬えた造語）である。人口808万人の信陽地区だけでも59年11月からの1年間で107万人も主に餓えて死に、⁵⁰⁾「人民公社」の名を使わぬ公社の先駆が出た遂平県も皮肉の様にこの激甚被災地区に在る。人民公社は78年の戸別農家請負制導入で実質的に解体し82年の憲法改正で廃止されたが、「土法」（中国在来の方法・技術）に由る「大躍進」は20年後「洋躍進」の変種で現れた。78年に華国鋒政権は近代化を急ぐ為に西側諸国の技術・生産設備に頼る大型工 程 群を計画し、翌年に外貨不足の所為で一部の設備購入契約の不履行が起き「大躍進」の頓挫を再演し、華は独自色と「政績」（政治業績）を追求する欲望で自ら墓穴を掘り辞任に追い込まれた。

「渤海2号」では日本から輸入した中古装置と従来の精神主義の「洋・土」が併用されたが、四半世紀後の2004年に始まった鉄道高速化の建設は別の意味の「洋・土」の側面を持つ。外貨準備高が06年2月に日本を抜いて世界1と成った中国はもう1流の物を買う金に困らないが、整備・活用等の点では在来の手法に依拠する処が相変わらず多く高い完成度の実現が難しい。「渤海2号」事故の1因として1968年に製造された当該設備の設計上の欠陥が挙げられたが、限られた外貨で購入した後に一部の説明書等の資料は翻訳・研究されることも無かった。⁵¹⁾「7.23」事故に由る直接的な経済損失額の1.937億元は日中戦争勃発の年を連想させるが、戦後の経済・社会の発展では往年の「惨勝」（辛勝）国は敗戦国に大きく負け込んで来た。「7.23」事故が起きた高速鉄道は在来線を活用して専用車輛「動車組列車」を走らせる型で、前月30日に開業し高架の上だけを走行させる北京—上海間の「中国版新幹線」とは違うが、媒体は原因究明の報道で日本の新幹線の絶対的な安全性を鑑に自国の落後を嘆いている。自主開発と銘打った「和諧号」は車輛で外国の技術を基にした等の寄せ集めとされる⁵²⁾が、前と前の前の世界経済「準優勝者」（国内総生産2位）との「洋・土」結合の産物の不備は、21世紀の初頭に勃興した新興勢力らしい「発展途上超大国」（造語）の未熟さを露呈した。

劉志軍は12月28日の国务院常務会議で「7.23」事故の主要責任者の1人と認定され、翌年の党籍剥奪（5月28日発表）を経て13年に北京市第2中級人民法院で裁判を受け、収賄・職権濫用の罪に由り7月8日に執行猶予2年の死刑判決が下された。一介の臨時雇いから大臣・中央委員の座に昇り詰めた「暴発戸」（成り上がり）の末路は、「多行不義必自斃」（不義を多く行えば必ず自滅する）という古人の言の通りである。同年3月14日の全人代議決に由る鉄道部撤廃で巨大な「独立王国」は呆気無く解体したが、「7.23」列車事故の犠牲が無ければこの抜本的な清算は遂げられなかった可能性が大きい。その衝突・「脱軌」（脱線）を社会の矛盾の爆発や規律の常軌からの逸脱の象徴と見るなら、「撥乱反正」（乱を撥ねて反を正す）と言う様に逆行を逆旋回させ正道へと戻す必要が有る。歴史の歯車の逆回転に対する逆回転は航空機や宇宙船の動きを制御する逆噴射を連想させるが、噴流発動機又はロケット発動機の噴射の向

きを進行方向と異なる方に変えるこの手段は、航空機の飛行中の場合は推力の反転に伴う速力・揚力の激減で操縦不能に陥りかねない。胡政権は飛行を続けながら軌道修正と着地準備を並行する様な「両難」に直面したが、高度成長と安全運転の両立への追求は「二兎を追う者は一兎をも得ず」に終る恐れ^{ほか}の他、金属疲労が溜まっている「機体」に急転回で変形・断裂が生じる危険性をも孕んでいる。

事故「7日忌」に当る7月29日に各地の数十の新聞が追悼・真相究明・糾弾の特集を組み、党中央宣伝部は驚愕の余り「刹車」(急制動装置^{ブレーキ}を掛ける。製肘^{せいちゅう})指令を下し記事差し替え等の事態を招いた。6日間に黙認された報道の自由はそれ以降他の重大事故・事件の場合でも封殺されて来たが、「日没」(原稿却下の「没」に引っ掛けた暗闇到来の形容)前の『南方日報』[7.29]社説は、経済発展を少し減速させて人民の尊厳も社会と共に進む高速列車に乗れるよう呼び掛けた。建国時に発足し南方報業伝媒集団(1998年成立)に属する同紙は中共広東省委機関紙であり、同集団傘下の『南方都市报』(95年創刊)と違って挑発の姿勢・過激な論調は許されないが、この冷静で痛烈な主張の影響は辛辣で痛快な「他媽的」の罵詈雑言の迫力に勝るとも劣らない。広東と省内の深圳市は本土の1級・2級行政区の中で1人当り所得の最上級の水準を誇るが、「先富」(豊かに成れる条件を持った一部の個人や地域は他より先^{ほか}に豊かに成ることを容認する)方針の最大の受益地域から、80年に提言した「改革・開放の総設計師」鄧小平の経済成長至上主義の弊害に対して警鐘が鳴った。鉄道部への討伐が中宣部の殺伐に遭った日の頂門の一針は異論の様で真^{しんせん}つ当な正論であり、翌12年の成長目標は前年の8%から7.5%に下がり15年には更に一段と下方調整された。⁵³⁾ 末代の鉄道部長盛光祖は就任の翌々月の2012年4月12日に『人民日報』の取材^{インタビュー}に対して、6月末に開通予定の京滬高速鉄道の運行速度は300^{キロ}と250^{キロ}の2種類にすると述べたが、減速開始の23日後の特大事故が示した慣性の恐さは経済調整の面でも大同小異であろう。

習近平時代(2012.11.15～)の経済成長速度の高→中高への定着は「新常態」と言うが、社会の新常態には腐敗の蔓延・秩序の不穩の「新非常態」「非常新(事)態」(造語)が有る。劉志軍裁判の直後の薄熙来裁判では汚職の前政治局員・重慶市委書記は無期懲役に処され、14年の6月30日(「党慶」前日)と翌月29日に徐才厚軍委副主席、周永康前政治局常務委員の失脚が公表され、改革・開放路線を採択した11期中総会の閉幕36周年の12月22日に令計劃が落馬し、上記3人と共に「新“4人組”」と見られる彼の中央統戦工作部部長は31日に解任された。丁関根の4代後の第11代(12.9～)として彼は同要職の在任中失脚の3人目になったが、2代目の徐冰(1964.12～66.12)と6代目の閻明復(85.11～90.11)は其々「文革」と「6.4」の所為なので、建国後初めて公にされた政治局常委・軍委副主席の汚職醜聞^{スキャンダル}と共に党の劣化を物語っている。「12.22」冬至の陰の極である故の「一陽来復」は「12.31」歳末の「辞旧迎新」と通じるが、この4字熟語の「旧年を送り新年を迎える」の他の「旧きを棄てて新しきを迎える」

意は、旧い勢力を辞めさせる新生の陣痛乃至出血の大変さを実際に繰り返して思い知らせている。2013年10月28日に天安門広場に車が突入し歩行者を轢いた上で炎上する恐怖攻撃が起き、直後の11月6日に薄・令の故郷山西の省委庁舎前に手製爆弾が爆発し同じく死者を出した。翌年3月1日に昆明駅で5人の暴徒に由る無差別斬殺で31人が死亡・141人が負傷と成り、翌々日に行われた中国人民政治協商会議第12期全国委員会第2回年次総会の開幕式では、議長の大青林全国政協副主席（中共中央書記処書記。前統戦部長 [07.12～]）の動議に由り、出席者一同（中共中央政治局常委会委員の全7人を含む）が被害者に1分間黙祷を捧げた、5日に開幕した第12期全人代第2回総会の冒頭でも同様の儀式が繰り返された。

建国後の党大会・「两会」（全人代・全国政協の年度全体会議）に於ける黙祷の前例として、「11大」開幕（77.8.12）の際に前年に逝去した毛沢東・周恩来・朱徳（命日＝9.9、1.8、7.6）、「10大」（73.8.24～28）以来及びその前の数年の間に他界した「無産階級革命家」康生・董必武・李富春・陳毅・賀龍（命日＝75.12.16、同4.2、同1.9、72.1.6、69.6.9）、この期間中に亡くなった党・革命に重要な貢献が有る全ての中央委員と他の同志たちに捧げられ、第8期全国政協・全人代第5回総会の初日（97.2.27、3.1）で鄧小平（2.18逝去）に捧げられ、「18大」開会（2012.11.8）の冒頭で毛沢東・周恩来・劉少奇・朱徳・鄧小平・陳雲等の古参革命家・革命烈士に捧げられた事が有るが、特定の事件の犠牲者である一部の民衆を対象にした初めての挙動は画期的な変化と言える。天安門・昆明でのウイグル族人に由る犯行では民族紛争が絡む要素も指摘されているが、令計劃に解任発表で止めを刺した31日の23時35分に共産党の生地上海で変事が起った。陳毅初代市長（49～58、後に外交部長〔兼副総理〕に転出、元帥）の名を冠した広場で、超密集状態の下で大勢の人が降り重なる様に転倒し36人圧死・49人怪我の惨劇と成った。

1987年12月10日に上海で起きた66人死亡の将棋倒し事件は略報じられなかったが、今回は「7.23」列車追突・転落事故と同じくインターネット上で忽ち惨劇の情報や論評が広がった。79年に所轄官庁から隠蔽された「渤海2号」沈没事故の半分に当る人命の犠牲に対して、習近平は直ちに負傷者への治療・善後処理・真相究明等を指示して高度の重視を見せた。市委宣伝部がメディアのトップ・ネガティブ報道を禁じた事も「7.23」後と二重写しに成るが、元日の同市『新民晩報』（29年創刊の夕刊紙）では紙名題字を普段の赤を黒に変えた上で、習の指示を大見出しにして1面を全て事故報道に当て習の新年賀詞を2面に後回しした。市委機関紙『解放日報』（49年創刊）の1面は習の賀詞と全国政協新年茶話会等の報道を主とし、一番下に100字未満の記事で伝えただけで計4面を使った『新民晩報』と対照を成している。習総書記選出の恰度2年前の上海静安区膠州路公寓大楼（高層集合住宅）「11.15」特別重大火災事故（58人死亡・71人負傷）の後、市委書記俞正声（習体制発足時に政治局常委に昇格、2013年3月より全国政協主席）は、实事求是の精神を以て迅速且つ正確に被災状況を報道し原因を突き止めるよう

要求したが、翌年「7.29」報道「戒厳令」の後遺症の所為か上海の元日の日刊紙は「日没」の字面通り、簡単に触れた『文匯報』（1938年創刊）を除いて大体「没有」（無かった）かの様に黙殺した。2日から『解放日報』等各紙で事故を詳報する様に成ったのは健全化の兆しと思われるが、前日の「党報」（党機関紙）で1面上段を占めた習主席の賀詞にも時代の進歩が見られる。

習は除夜に放送媒体を通じて内外に送る「辞旧迎新」の賀詞の第2段落（全11段落）で、今年の多くの改革の举措は「老百姓」（庶民）の利益と密接に関連するものであると強調した。経済面の成果として先ず挙げた南水北調中線（中央経路）工程1期の送水開始（12.12）に就いて、異郷への移転を以て工程に無私の奉獻をしてくれた40万人の沿線住民に敬意を表した。第4段落では「中国人民抗日戦争勝利記念日」「烈士記念日」「南京大屠殺死難者国家公祭日」の法定化及び関連行事に就いて、国家・民族・平和の為に尊い生命を捧げた人々の犠牲と奉獻を永遠に銘記しなければ成らないと力説した。次の段落では去る1年の中の幾つかの「令人悲傷の時刻」（人を悲しませる瞬間）に言及し、第1にマレーシア航空MH370便失踪（3.8）で150人余りの同胞が行方不明の儘でいることを挙げ、我々は彼等を忘れることが無く引き続き手を尽して発見できるよう努力して行くと述べた。路線提携に由り中国南方航空748便でもある同便はクアラルンプール発北京行きの途中で、^{ベトナム}越南北部の海域に消息を絶ち一時国際的な救援及び様々な憶測が渦巻く怪事件と成ったが、習は次に自国の重大な自然災害・安全事故に由る少なからぬ同胞の不幸な他界を取り上げ、雲南魯甸地震（8.3, M6.5）だけでも600人余りの遭難死が有り、我々は彼等を偲びその親族の安全・幸福を祈ると結んだ。同じ雲南の省都で起きた「3.1」惨劇には触れず域外の「3.8」航空機事故を重点とした事で、事変当初から燻っていた国内の反腐敗・政争等に絡む陰謀説を蒸し返す向きも有ったが、この段落は前段と合せ考えれば平和時代に無辜の犠牲を払わされた尊い命への鎮魂と言える。

『新民晩報』で「次要」（二の次）扱いと成った2面の国家主席の新年賀詞の大見出しは、「各級幹部也是蛮拼的 為我們偉大人民点贊」（各級の幹部は好く頑張った 我が偉大な人民に称賛を送る）と為っている。「奉獻」に対する礼賛の突出は1面を埋め尽した「犠牲」への痛惜と絶妙な均衡が取れるが、僅か50字の第3段落から各9字の文を対と成る目玉にした編集は鮮やかで意味深長である。副詞の「蛮」は「很・挺」（とても）と同義の方言で字面通り「滅茶苦茶に」の語感も濃く、国家の品格に関するこの種の賀詞での使用は「挺」（北方の口語）と俱に通常なら論外である。「拼」は「繋ぎ合せる」「寄せ集める」「懸命に取り組む」「必死に遣り合う」等の意が有り、「蛮」との組み合わせは素直に訳せば「めっちゃ本気で頑張っている」といった処であろう。原籍が陝西で北京出身の北方人習は南方語に多い「蛮」を含むこの俗語を敢えて使ったが、同じく国語辞書に見えない「点贊」（称賛を送る）もインターネットで生れて日が浅い新語である。「点」（「点撃」「クリック」）+「贊」（「いいね」[「いいね」ボタン]

押す」意で、回数が人気度の指標を為す^{コミュニケーション} 交 流 手段から来たこの単語は支持・応援等を表す用法も有る。折しも同月1日に国家新聞（報道）出版広電（^{ラジオ・テレビ} 廣播電影電視）総局は通達の行政命令を以て、「^{インターネット} 網絡語言」（^{インターネット} 電腦網上の独特の言葉）を基にする造語の使用・紹介を禁じたばかりである。主席賀詞の録音・録画放送は規制範囲の^{ラジオ} 放送・テレビの番組・^{いな} 広告に入るか否かは別として、^{あざわら} 国語の規範を厳守する名目で恣意に取り締まる官庁の活用は愉快である。「7.23」事故後に温家宝が記者会見で真相開示を求めた翌日に中宣部は^{メディア} 媒体に^{かんこうれい} 箝口令を敷き、総書記・総理の「政令不出中南海」（政令は中南海から外に出ない）の実態が露呈したが、^{ぬし} 宣伝主管部門の政令を無視した今度の中南海の主の発信はその倍返し^の 反転の様^に 映る。報道機関と「^{ネット・シチズン} 網 民」を喜ばせた1対の「^{ハイ・ライト} 亮点」には習の人気取りの魂胆が透けて見えるが、人命尊重と表現の自由への配慮は「7.23」事故と関連の言説封殺の教訓の効き目を窺わせる。

解題

筆者は1989年「6.4」惨劇後（当時、京都工芸繊維大学工芸学部助教授）の衝撃・虚脱の中で、中国明朝の建文帝の数奇な生涯を描く幸田露伴の小説『運命』（1919）に出会い感銘を受けた。これを契機に研究分野を日・中現代文学の比較から両国の文化・社会・政治等の比較に移したが、「世おのづから^{すう} 数といふもの有りや。（略）^{きつきょうくわふく} 吉凶禍福は皆定数ありて、^{ていすう} 飲啄笑哭も^{いんたくせうこく} 悉く^{こと} 天意に因るか^{てんい} と疑はる。（略）^{たとへ} 假令数ありとするも、^{はか} 測り難きは数なり。（略）」と言った冒頭の感慨に触発され、中国及び日本の歴史の到る処に隠れた「^{プレート} 天数」（時間軸の中の神秘的な節目や相関）を手掛りに、社会の発展上の意義や他の事象との関連等を探り将来への予測を試みる作業に興味を覚えた。成果として論文『^{すう} 劫・^{すう} 劫波の数・^{プレート} 趨：歴史の環・節と日中間の「^{プレート} 板塊」移変・異変考』（中国語。本誌11巻2号、98年12月、1～19頁）から、直近の『^{プレート} 詭異暗合：歴史人物生卒、歴史事件発生時日中含天命・天意、天理・天道的天数・天機——中共双重誕辰虚実、中国多輪演進変幻所隱現的「時環天数・劫結天機」論考』（中国語、「之一」は同25巻3号、2013年3月、251～303頁；「之二」は26巻1号、同年6月、75～113頁）等を発表して来た。^{シリーズ} 系列論文である後者は「解題」で記した通り記念論集の制約上^{タイトル} 論題を便宜的に付けたものであり、論著『由「8341」、「9.9」、「紅羊劫」等「時環天数」縦観中国的多難命運——兼論恰逢中共實際党慶90周年の「7.23」甬温線高鉄惨禍之歴史拐点的奇特性質』の1部なのである。

論文発表後の『^{ニュースウィーク} Newsweek』日本版13年10月15日号に、ジェフリー・ワッサーストロム氏（カリフォルニア大学アーバイン校歴史学教授、中国現代史）の論説『成長神話が崩れた中国の行方』が掲載された（25～27頁）が、「高速鉄道が転換点に」と題する1節の分析は筆者の見解と通じ合う処が多い。因みに、次の1節の題の「^{プレート} 覇権を目指す余裕がない」も、筆者が『中国走向覇権軍国的危険性と和平崛起的安全閥』（中国語。連載の上・中・下は本誌18巻1号[05年6月]217～260頁、2号[同10月]41～78頁、19巻1号[06年6月]89～133頁）等数本の論文で唱え続けた

論断である。筆者の本研究の独自性は先ず、「7.23」事故が中共の「90歳誕生日」に起きた事の象徴性に着眼し、同じ「90歳代」の1年目の谷開来（薄熙来夫人）等による英国実業家殺害事件、王立軍米国総領事館亡命未遂事件と合せて、歴史の転換点であると共に胡錦涛時代末期の不祥事及び次世代への負の遺産として捉える点に在る。『破底超限：薄熙来事変之「逆主流危搏」的教訓（一）』（中国語。同26巻3号，14年2月，1～45頁）では、谷殺人の「11.15事案」と翌12年「11.15」の習近平体制誕生とを結び付けて分析しているが、この主題に関する思索は執筆中の著書『習近平の「超限戦」』で展開して行きたい。

世代交代の交差点に当る第18期党中央1中総会の恰度15年前の1997年11月15日は、奇しくも筆者の人生の分岐点と成る本学部の専任教員採用の面接試問を受けた日である。選考委員長を務められた小木裕文教授のご退職を記念して本稿を寄せるのも巡り合せを感じるが、筆者の研究の新しい出発点と成る本稿は小木先生のご期待に応えられれば幸いに思う。2年前に先生から共著論文『浙江省温州市近郊青田県の僑郷としての変容——日本老華僑の僑郷からヨーロッパ新華僑の僑郷へ』（『地理空間』第5巻第1号，12年6月，1～26頁）を頂戴したが、「7.23」事故の場所は温州域内の浙江—福建路線なので、福建省の「僑郷」を重点的な研究対象としておられる先生とのお縁を改めて実感した。本稿は記念号の特性で連載の形が取れず「老大党」に関する詳論は割愛せざるを得なかったが、続篇では「資本主義化の温床」「中国のエルサレム」と呼ばれる温州の土地柄を切り口にして、「7.23」後の全国規模の報道・言説規制と14年の浙江省の基督教強制解体の動向を取り上げ、「ネットワーク・宗教」の2大脅威の擡頭と官・民攻防の末の1党独裁の行方等を論じる予定である。

注釈

- 1) 本稿中の事故に関する基本情報（発生時刻・死傷者数乃至高架橋と地面の距離等）は、『「7.23」甬温線特別重大鉄路交通事故調査報告』（国务院「7.23」甬温線特別重大鉄路交通事故調査組，2011年12月25日。国家安全生产监督管理总局網站28日公表）に依拠し、中国・日本に於ける当初の多くの報道とは一部相異が有る。
- 2) 『南方都市报』2011年7月29日『7.23温州動車追尾七日祭』特集中の記事『一場備受爭議的營救』（記者楊曉虹・林颯・張建徳・覃敏）に、中国人民大学制度分析・公共政策研究中心の舒可心研究員の然様な反応が報じられている。
- 3) 同上特集中の『温州特警支隊長邵曳戎：不是他堅持原地清理 小伊伊差点被遺棄』（作者は同上）。
- 4) 同上特集中の『鉄道部否認宣布「車内無生命迹象」』（記者王星）。
- 5) 『中国追突事故 指導部衝擊，対応急ぐ 当局局長等3人を更迭』（北京＝森安健），『日本經濟新聞』2011年7月25日。
- 6) 極端な例として、1970年5月21日の首都各界群衆集会（於・天安門広場，50万人参加）で毛沢東の声明を代読する林彪（党中央・軍委副主席、国防部長）は、病弱の所為か出発前に鴉片か覚醒剤と思われる「ある種の薬物の注射」を受けた（張雲生『毛家湾紀実——林彪秘書回憶録』，春秋出版社，1988年，330～333頁。日本語版「横山義一訳『私は林彪の秘書だった』，徳間書店，1989年」215～

218頁）。

- 7) 分析付きの文献として、神劍動山河『鉄血大動脈——在探索中曲折前進的中国鉄道事故史』（天涯社区網、2012年1月9日）、『鉄軌之上，国有殤』（記者陳彦煒・見習記者何贊^{ひん}、『南方人物週刊』〔南方報業传媒集團〕2011年第26期）等有る。前者は建国後の最初の重大事故（1950年1月23日）に溯っているが、権威有る出典の詳記が無いのは惜しまれる。その中で主な「^{データ}データ」の出処として挙げられた後者の瑕疵として、1988年「1.24」事故に就いての記述では「3.24」事故と混同して、日本人乗客の多数死傷に由り外国人被害の最も多い事故であると誤記されている。
- 8) 『鉄軌之上，国有殤』の記述には、2008年「1.23」「4.28」事故に対して「衆怒到達極致」（大衆の怒りは頂点に達した）と有る。
- 9) 程美東『透視当代中国重大突発事件（1949—2005）』（上・下2巻，中共党史出版社，2008年）第2篇中の『“渤海二号”沈船事件』に詳述が有る。
- 10) 何建明『破天荒：中国对外開放的劃時代事件』（作家出版社，2008年）第9章『“渤海二号”事故的衝擊波』に詳述が有る。
- 11) 注9に同じ。
- 12) 『黄克誠伝』編写組著『黄克誠伝』（当代中国出版社，2012年）に詳述が有る。
- 13) 『因非典型辭職的衛生部長：SARS，考驗的是政治文明』（新華網〔作者・初出日未詳〕，浙江在線新聞網站2008年9月24日轉載）等の論述に詳しい。
- 14) 毛沢東『增強党的團結，繼承党的傳統』（1956年8月30日，於・中共第8回全国代表大会予備會議）。
- 15) 『回眸百年機場 14年128人魂斷中秋節前1天』（記者王海涵，南方網，2004年6月23日（『南方都市报』より轉載，同紙掲載日は未記載））。
- 16) 東北航空有限公司は中国東北航空公司（1988年創設）を前身に2006年に成立し，10年に四川航空集團の買収に由り河北航空有限公司に改編された。
- 17) 『中央紀律検査委員会向党的第十三次全国代表大会的工作報告』（1987年10月30日）では，「原中共中央委員、国家民航局局长沈凶嚴重違反外事紀律、以權謀私案」が取り上げられている。
- 18) 『歷史上的今天 1983年5月5日 卓長仁劫機』，人民網，2003年8月1日。
- 19) 『嚴厲打擊刑事犯罪活動』と題するこの談話は、『鄧小平文選』第3巻（人民出版社，1993年）に収録されている（33～34頁）。
- 20) 『国軍與解放軍間的駕機叛逃事件』，『維基百科 自由的百科全書』（中文繁体字），2015年1月2日更新版。
- 21) 『大陸劫機犯的帰途：1993年10架客機被劫持到台湾』，鳳凰網，2003年3月4日（新華網掲載『国際先駆導報』より轉載，原典の作者・掲載日は未記載）。
- 22) 『于幼軍「復出」背後』（記者沈亮・馬昌博。南方週末網2011年2月17日掲載の『南方週末』記事）。文中，孟学農の「転赴山西」（山西への転勤赴任）を2007年9月としたのは7月の誤りである。
- 23) 『「不要写成一般的政治教科書」——于幼軍發憤写作《社会主义五百年》』（記者朱又可。南方週末網2011年7月1日掲載の『南方週末』記事）。
- 24) 日本の英字誌『ザ・ディプロマット』電子版2012年1月1日の記事で，「中国は1月11日に行動を起すことを好む。彼等（解放軍）は毎年この日に興味深い事を行う」と言う米国マサチューセッツ工科大学の海軍専門家オーウェン・コートの話を引用している。07、10、11年の例を根拠に縁起の好いとされるこの日に重要な兵器実験を行う傾向が指摘されたが、『中国国防報』11日の記事『解放軍：1月11日不神秘 武器実験不挑幸運日』（記者曲延涛）は，軍総装備部・第2砲兵の関係者に確認した結

- 果として「吉日」は存在せず、過去の事は単に偶然で外国媒体の憶測は全くの牽強附会であると言う。
(『中国の新兵器実験にいわゆる「吉日」はない』[人民網日本語版, 同 13 日] 参照)
- 25) 死者数は海外で異説が有り公表分の倍以上とも言われるが、本稿では林泉『地球的震撼』(地震出版社, 1982 年)の数字(銭鋼『唐山大地震』[当代中国出版社, 2005 年] 2 頁より)に拠る。
- 26) 『19 日,《第 28 次中国互聯網發展狀況統計報告》發布 我國網民達 4.85 億 微博用戶增長 208.9%』(記者趙重輝), 『人民日報』2011 年 7 月 20 日。
- 27) 張鑫『動車追尾事故之後的民間力量』, 中国網絡電視台, 2011 年 7 月 26 日(季節『從 7.23 動車追尾事件看媒体反應——微博在行動』, [西安]『今传媒』月刊 2012 年第 2 期)。
- 28) 『「7.23」動車追尾事故 微博成最早信息源』, 中国最權威的新聞出版資訊網站, 2011 年 7 月 28 日(『中国青年報』より)。
- 29) 銭鋼『唐山大地震』, 171 ~ 173 頁。
- 30) 『媒体還原温州動車追尾事故過程 高鉄管理被指存缺陷』, 『中国新聞週刊』(中国新聞社) 2011 年第 28 期(中国新聞網, 2011 年 7 月 28 日); 張書舟『媒体還原温州動車追尾事故經過』, 新浪網 2011 年 7 月 29 日(『南方都市報』より)。
- 31) 『電源難民, 米空港を放浪 設備追いつかず』, SankeiBiz, 2014 年 9 月 3 日。
- 32) 『省水電集団: 給美姑無電地区送去動力和光明』, 『四川日報』2011 年 3 月 22 日。
- 33) 『掛職団幹為無電村教師送「光明」』(記者黃思明・特約記者白里呷), 楚網, 2012 年 9 月 10 日。
- 34) 『温州事故動車幸存童女母親最後一条微博引熱議』(記者李亞彪・商意盈・王釋文), 新華網, 2011 年 7 月 28 日。
- 35) 王鴻諒『項余岸和施李虹: 在另一個世界守護伊伊』, 『三聯生活週刊』(生活・讀書・新知三聯書店) 2011 年 8 月 8 日号。
- 36) 『項余遇發布致鉄道公開信 懇請政府部門和医学專家幫助小伊伊, 恢復其双腿的正常功能』(記者丁建庭), 『広州日報』2011 年 8 月 15 日。公開書簡の題は『請保住伊伊的双腿! ——致鉄道部的一封公開信』。
- 37) 銭鋼『唐山大地震』, 36 ~ 42 頁。
- 38) 張樹藩『信陽事件: 一個沈痛的歷史教訓』, 『百年潮』月刊(中共中央党史研究室主管、中国中共党史学会・中共党史出版社主催) 1999 年第 12 期。
- 39) 方坤『哀悼与團結的曲線』, Google 黑板報, 2008 年 5 月 22 日。
- 40) 『公司老板承諾為動車事故幸存女孩捐贈百万』(記者蔣小康・實習生沈騰), 華聲在綫, 2011 年 7 月 27 日。
- 41) 『揭秘五位終生不予改正的中央級“右派”』, 鳳凰網 2012 年 4 月 12 日(『快樂老人報』より。作者・刊行日は未記載)。5 人の「中央級“右派”」に対して名譽回復を行わない決定は, 中共中央統一戰綫工作部『關於愛國人士中的右派復查問題的請示報告』(中共中央『批轉中央統戰部《關於愛國人士中的右派復查問題的請示報告》的通知」[1980 年 6 月 11 日] 所収)に見える。葉永烈は『反右派始末』(青海人民出版社, 1995 年)の中で当該報告書・党中央通達を引用し, この決定は「反右派鬭争」を正当化する為であると指摘している(628 ~ 629 頁)。
- 42) 韓啓徳(主席)『第十二届中央常務委員会工作報告』(九三学社第 12 期 6 中総会審議・採択, 2012 年 11 月 28 日)。
- 43) 三峡在綫『動車女孩項璋伊爸爸媽媽生前最後微博全是愛的記錄』, 「新浪名博三峡在綫」, 2011 年 7 月 26 日。
- 44) 1 例として, 注 35 の記事を載せた『三聯生活週刊』の特集の題は『「7.23」事故追問 人的問題』。
- 45) 邵維正『板凳需坐十年冷 文章不写一句空——对中共一大考証的回憶』, 『中共党史研究』(中共中央 204 (996))

- 共党史研究室主催、月刊）2000年第4期；徐焯『中国共産党究竟誕生於何時』、『学習時報』（中共中央党校主催、週刊紙）11年8月1日；葉永烈『紅色的起点』、安徽教育出版社、2009年、220～221頁。
- 46) 第29回国際東^{オリエント}方学者大会（1973年、於・巴里）で台湾の中共党史研究家郭華倫は論文発表の中で、「1大」開幕日が今も判らず適当に誕生日が付けられた中共は私生児の様であると揶揄した。彼は40年に中央南方工作委員会組織部長在任中（変名＝郭潜）叛徒に成り、後に国民党の情報機関で要職を務め69年に国際関係研究所の副主任・教授に転身した。その悪意の攻撃と7月27日開幕説は大陸の学者の反撥・不服を招き、邵維正は「私生児」云々の嘲笑を発憤のバネにして真実究明に励んだ。（金志宇『成為特務首腦の中共叛徒郭潜』、『世紀風采』[江蘇省委党史辦公室主催、月刊]13年第3期）
- 47) 1987年版「百家姓」（使用人口数が上位100位の姓）は中国科学院遺伝研究所の杜若甫研究員・袁義達助理研究員の研究発表（袁・杜編著『中華姓氏大辞典』[教育科学出版社96年刊]に、これに基づく上位300位の「中国当代三百大姓」が有る）。2006版は袁義達（中科院遺伝・發育生物学研究所研究員）が中心と為る調査の結果で、袁・邱家儒（実業家・族譜編纂家）編著『中国姓氏・三百大姓：群体遺伝和人口分布』（華東師範大学出版社、07年）が集大成。07年版は公安部に由る全国戸籍人口の最新統計。13年版は袁義達（兼中華伏羲文化研究会華夏姓氏源流研究中心主任）の発表で、詳説は袁・邱家儒（中国文化促進会副主席）共著『中国四百大姓』（江西人民出版社、13年）に見える。
- 48) 陳統奎『邵叟戎：讓社会看見「善能」』、『南風窓』（広州日報報業集團、隔週刊）2011年第26期；『希望群衆的幸福指数越来越高 訪鹿城区第一任区委書記邵錫水』（見習記者郭雲豪、『温州日報』2014年8月21日。
- 49) 中共中央文獻研究室編、逢先知・金沖^{ほう}及主編『毛沢東伝（1949—1976）』、中央文獻出版社、2003年、828頁。
- 50) 信陽地区当局が1961年1月13日に中央に報告した最終集計の数字（林蘊暉『中華人民共和國史』第4卷『烏托邦運動——從大躍進到大飢荒』、香港中文大学、2008年、612頁）。
- 51) 方振著『「渤海2号」翻沈真相（1979）』、中国石油石化網2013年12月25日（『中国石油石化』誌[中国石油天然気集團公司・中国石油化工集團公司・中国海洋石油集團公司共催、月2回刊]より）。『「渤海2号」鑽井船事故及其教訓』、石油之光網（中国石油大学）14年2月7日（作者名未記載）。
- 52) 『中国高速鉄道脱線 制御機構は中国製 外国の技術混在 安全対策脆弱に』（北京＝成沢健一・工藤哲）、『毎日新聞』2011年7月25日。
- 53) 『中国「成長を調節」 来年の経済運営方針 7%前後軸に』『中国、軟着陸めざす 高速成長から中高速へ』（北京＝大越匡洋）、『日本経済新聞』2014年12月12日。

（夏 剛、立命館大学国際関係学部教授）

“新兴国·老大党”的蹉跌与考验 ——“2011.7.23”（中共“90 诞辰”）高速铁路特大车祸的冲击和启示

中国首次作为世界第 2 大经济体在高速发展的轨道上继续猛进的 2011 年，盛夏雷雨之夜在温甬线发生“和谐号”动车追尾冲突、脱轨颠覆而致众多死伤。特大事故根源在过度追求建设速度、规模而疏于排除隐患，暴露出 21 世纪世界新兴势力之雄中国的繁荣表象之下的不成熟。处理惨祸时一度按惯例就地掩埋毁损车辆等粗暴做法，以及为尽快恢复通车而较早放弃搜索救援的草率行径，引发内外公众、舆论抨击铁道部对安全、人命欠重视、尊重。温家宝事后赴现场开创了总理为交通事故亲临视察、慰问的首例，而在他表示要追究原因的翌日中宣部对媒体报道紧急“降温”、“刹车”，加剧了思想管制僵化、政治压抑蛮横的印象。

笔者认为：悲剧上演于中共 1 大开幕 90 周年之日的巧合，象征着“高龄”大党统治面临动摇的危机；事故信息传播、公众舆论发力的新形态，使 2011 年堪称“民意直播元年”或“网民崛起元年”；恰逢辛亥革命 100 周年的这 1 年中的本次事件，或许会以偶发的非暴力演变成为本世纪中国历史的拐点之一。

本文回顾改革开放以来尊重生命的普世价值、揭示真实的报道自由的渐进与受阻，指出习近平时代尽管尚存相当大量的毛泽东时代以来的“负遗产”，但胡锦涛时代的亲民努力及“7.23”冲击的教训多继承、转化为正能量，其最新例证即是习主席 2015 年新年贺词中悼念国民遇难、刻意活用网络新语。

（夏 刚，立命馆大学国际关系学院教授）